

石に刻まれた千歳の歴史 碑文編

協働事業「市内石碑・石像などの追加調査と碑文集の刊行事業」報告書

石に刻まれた
千歳の歴史
碑文編

平成二六（二〇一四）年一月

千歳市
千歳文化財保護協会



千歳市・千歳文化財保護協会

目次

- ・刊行にあたって・・ 2
- ・この報告書を利用される皆さんへ（凡例）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- ・千歳市所在の碑、像、塔等一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- ・石碑等分類別・年代別一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- ・A皇室に関するもの（六基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- ・B戦没者慰霊等、戦争に関するもの（五基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- ・C市政・市史に関するもの（一五基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- ・D開拓・地域開発に関するもの（一三基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
- ・E家畜等の慰霊・供養に関するもの（一六基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
- ・Fふ化事業等に関するもの（三基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
- ・G空港に関するもの（五基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
- ・H宗教・信仰に関するもの（八基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
- ・I学校関係（一七基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
- ・J顕彰に関するもの（六基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
- ・K企業・団体等に関するもの（八基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
- ・Lその他（九基）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
- ・拾遺1「廃却された鶏魂碑」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
- ・拾遺2「撤去された石狩空知郡界標柱」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
- ・拾遺3「移設改修された駐蹕之地碑」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
- ・拾遺4「協働事業石碑・石像調査の原典」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
- ・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
- ・協働事業「市内石碑・石像の追加調査と碑文集刊行事業」実施記録・・・・・・・・ 99
- ・千歳文化財保護協会紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
- ・あとがきに代えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101

刊行にあたって

千歳文化財保護協会会長 榊原武雄

このたび、念願であった「石に刻まれた千歳の歴史 碑文編」を刊行できますこと、会員一同喜びにたえません。

当協会は創立三〇周年記念事業の一環として平成二一、二二年度の二年間にわたり**協働事業「市内石碑・石像などの調査事業」**を実施し、その成果を平成二三年三月、「石に刻まれた千歳の歴史」として刊行しました。

この報告書は多くの方々からご好評をいただきましたが、その体裁、内容は石碑・石像等の総覧的なものでした。それらの建立の趣意や由来、関わった人々の想いや足跡を刻んだ碑文は制約上ほとんど割愛せざるを得ませんでした。

調査記録の段階でも碑文の史料的价值の大きさは実感しておりましたが、報告書刊行後、石碑・石像を手がかりに千歳の歴史を振り返ってみようとの趣旨で実施した五回の研修会を機に、それらの碑文は千歳の市史を補完する重要な史料であり、貴重な文化資産であるとの認識をさらに深くし、碑文を主体に収録した碑文集をぜひ作成したいと考えておりました。

そして今年度改めて**協働事業「市内石碑・石像の追加調査と碑文集刊行事業」**に取り組み、この碑文編をまとめた次第です。前回の報告書とこの碑文編の二冊で市内に所在する石碑・石像等のほとんどを収録できましたので併せてご活用いただければ幸いです。

なお、前回調査で見落としたもの、その後新たに建立されたものがありましてので追加調査を実施し、新たに七基を確認しましたの

でこの碑文編には前回の一〇四基に加え一一一基を収録しました。

千歳市は昭和六二年三月、「市内所在の石碑・塔調べ 報告書」を刊行しており、その巻頭言「はじめに」は、千歳空港の開基六〇周年、昭和六三年はまちづくりの大きな起爆剤となる新千歳空港開港という重要な節目となることに触れ、次のように述べています。「二一世紀への橋渡しをすべく先人の記した史蹟の調査整備を行い、史蹟記念物として長く保存していくと共に、市民にこれらの所在を明確にし、その功績を広く知らしめることが責務と思ひ、ここに本編をまとめる。今後とも、さらにこうした史蹟の追加調査を継続し、新しい観光資源等、市民のものとして活用されることを願う」。

当協会は千歳を知る会とともに、この報告書を資料に数回の石碑めぐりを行い、掲載されている五一基の石碑・石像等のうち既に廃却されたもの、移設されて所在が分からないものがあることを知り、改めて調査と記録の必要性を感じておりました。それが二度にわたる協働事業への取り組みの契機であり、史蹟に寄せる先人の想いに応えるものと信じます。

遠い昔から数多くの先人たちの想いと足跡の上に築かれてきた千歳の郷土資料として、また市史を補完する副読本としても市民の皆様様に二冊の報告書を活用いただきたくないと願う次第です。

今後は調査のために収集した資料、写真、パンフレット、記念誌なども大切に保存し、拓本も裏打ちしたいと考えております。

ご支援を賜りました千歳市、千歳市埋蔵文化財センターやご協力いただきました多くの方々、会員の皆様さんのご苦勞に心から感謝し厚くお礼を申し上げます。

この報告書を利用される皆さんへ（凡例）

はじめに

・この報告書は、千歳市と千歳文化財保護協会が協働事業として実施した「市内石碑・石像の追加調査と碑文集刊行事業」の成果です。以下のことにご留意の上ご利用ください。

一 表題、体裁について

・この報告書は、平成二十三年三月に発行した「石に刻まれた千歳の歴史」の続編として、碑文を主体に編集したので表題を「石に刻まれた千歳の歴史 碑文集」としました。

・したがって、石碑等の分類、配列は前回報告書を踏襲しました。

・石碑等の現況確認のため写真を付しました。

二 新規確認の石碑等について

・追加調査によって新たに七基の石碑・像を確認し、それらは建立年代の新旧に関係なく各分類の最後に追加の形で記載しました。

・新規確認のみ所在地、石材・寸法を記しました。

三 碑文等の記載について

・石碑、上台、台座等に刻まれた文字や表記されているすべての文字を採録し、現況のとおり記載することに努めました。漢字の草書体や万葉仮名などは楷書や当用漢字などに換えて記載したものがありません。

・摩耗、剥落等のため判読不能の文字は「○」で表示しました。

・異体字には「※」を付して、字体を説明したものもあります。

・タテ書き、ヨコ書きについては、「(石碑正面タテ)」、「(台座背面ヨコ)」のように付記し、現況のとおりに記載しました。

四 新規確認の石碑等の石材・寸法の表示について

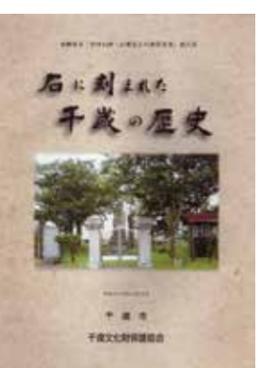
・石材は一般的な通称を用いました。札幌軟石・島松軟石(凝灰岩)、安山岩(火山岩の一種)、御影石(花崗岩)など。

・寸法はすべてセンチメートル(㎝)単位で表示。「H」は高さ、「W」は幅、「D」は奥行き・厚さを意味します。

・自然石や不定形な石材は、それぞれ最大値を示す部分の数値を表示しました。

五 不明なものについては「空欄」としました。

六 前回報告書「石に刻まれた千歳の歴史」は千歳市のホームページに掲載されています。



千歳市所在の碑、像、塔等 一覧(分類、年代順)

D 開拓・地域開発に関するもの

D01	農國基碑	東丘 国道 234 号脇 砂原宅向い	昭和 16 年 8 月 26 日	東丘連合会
D02	福岡佐六翁碑	東丘 東丘八幡宮	昭和 44 年 11 月再建	東丘連合会
D03	長都開拓記念碑	北信濃 864 開拓記念公園	昭和 46 年 12 月 11 日	千歳市
D04	すみよし2号公園碑	住吉 2 住吉2号公園	昭和 48 年 4 月	千歳市
D05	理想郷碑	稲穂 4 丁目 稲穂公園	昭和 56 年 4 月	千歳市
D06	この地をば…碑	梅ヶ丘 1 梅ヶ丘公園	昭和 56 年 11 月	千歳市
D07	仲よしの松碑	千代田町 7 JR 千歳駅前	昭和 58 年 6 月 12 日	千歳市
D08	豊栄郷碑	豊里 5 豊里くるみ公園	昭和 59 年 10 月	千歳市
D09	駒里開基百年碑	駒里 945 駒里小中学校	昭和 61 年 11 月 23 日	駒里連合会
D10	禹甸荘碑	泉郷 泉郷神社	昭和 63 年 1 月	泉郷連合会
D11	開拓百年記念碑	泉郷 泉郷神社	平成 4 年 9 月 21 日	泉郷連合会
D12	風雪に耐え碑	上長都 明星公園	平成 7 年 7 月	千歳市
D 13	黎明郷碑	稲穂 3 丁目 稲穂やすらぎ公園	昭和 62 年 10 月	千歳市

E 家畜等の慰霊・供養に関するもの

E01	馬頭観音像	泉郷 268-9 馬頭観音堂内	大正 5 年	泉郷連合会
E02	馬頭観音像	泉郷 268-9 馬頭観音堂横	昭和 3 年 12 月	泉郷連合会
E03	家畜報恩碑	長都 長都酪農会館前	昭和 12 年 7 月	長都町内会
E04	馬頭観音像	幌加 172	昭和 13 年 4 月 17 日	幌加連合会
E05	馬頭観音碑	泉郷 268-9 馬頭観音堂横	昭和 15 年	泉郷連合会
E06	獣魂碑	安平町遠浅 北海道畜産公社早来工場	昭和 32 年 5 月 16 日	北海道畜産公社
E07	馬頭観音像	中央 国道 337 号脇	昭和 40 年 5 月 15 日	中央連合会
E08	獣魂碑	幌加 172	昭和 46 年 12 月 4 日	幌加連合会
E09	鶏魂碑	駒里 道央養鶏	昭和 47 年 5 月	道央養鶏
E10	鶏魂碑	駒里 道央養鶏	昭和 47 年 7 月 5 日	道央養鶏
E11	犬魂碑	駒里 市営牧場脇	昭和 50 年 10 月 27 日	千歳市
E12	家畜報恩碑	駒里 駒里会館横	昭和 51 年 10 月 17 日	駒里連合会
E13	報恩碑	都 寺岡牧場	昭和 53 年 11 月 12 日	寺岡牧場
E14	馬頭観世音菩薩碑	東丘 154 若山牧場	昭和 57 年 6 月	若山牧場
E15	獣魂之碑	幌加 156 明石畜産	昭和 58 年 6 月	明石畜産
E 16	馬頭観世音碑	美笛 千歳橋傍	昭和 16 年 7 月 17 日	千歳鉱山製材所

F ふ化事業等に関するもの

F01	鮭鱒人工孵化發祥記念碑	蘭越 9 さけますセンター千歳事業所	昭和 19 年 11 月 3 日	さけますセンター
F02	北海道虹鱒養殖発祥之地碑	蘭越 9 さけますセンター千歳事業所	昭和 41 年 9 月 16 日	さけますセンター
F03	千歳サケの里碑	花園 2 サーモンパーク	平成 6 年 9 月	千歳市

A 皇室に関するもの

No.	名 称	所 在 地	建 立 年 月 日	設置者・管理者
A01	駐蹕之地碑	本町 5 新保宅前	明治 42 年 9 月	千歳市
A02	報恩碑	蘭越 苗別橋畔	昭和 5 年 9 月	千歳市
A03	野外統監部御跡碑	祝梅 東千歳駐屯地	昭和 12 年 10 月 4 日	東千歳駐屯地
A04	天皇皇后行幸啓記念碑	北栄 1 北栄小学校地	昭和 30 年 12 月 16 日	千歳市
A05	植樹祭記念碑	モラップ	昭和 37 年 5 月 24 日	北海道
A06	御下賜記念碑	泉郷 403 千歳いずみ学園	昭和 49 年 11 月	千歳いずみ学園

B 戦没者慰霊等、戦争に関するもの

B01	凱旋記念碑	泉郷 泉郷神社	明治 39 年 3 月	泉郷連合会
B02	忠魂碑	中央 中央八幡神社	明治 44 年	中央連合会
B03	招魂碑	真町 青葉公園	昭和 33 年	千歳市
B04	恒久平和祈念の碑	真町 青葉公園	平成 6 年 10 月 29 日	千歳市遺族会
B05	長都記念墓石	長都共同墓地	昭和 11 年 4 月 29 日	長都町内会

C 市政・市史に関するもの

C01	市民の像	東雲町 2 市役所前庭	昭和 36 年 8 月 13 日	千歳市
C02	交通安全宣言都市碑	北斗 4 丁目 国道脇	昭和 37 年 3 月	千歳市
C03	千歳市政浄化有志会記念之碑	末広 末広第二霊園	昭和 52 年 10 月	今家
C04	千歳市開基百年記念碑	真町 青葉公園	昭和 54 年 8 月 4 日	千歳市
C05	市民の森開基百年記念植樹標	向陽台 百年記念の森	昭和 54 年	千歳市
C06	タイムカプセル	北栄 2 市民文化センター	1979 年 12 月 15 日(昭 54)	千歳市
C07	ツルのモニュメント	千代田町 7 JR 千歳駅前	昭和 56 年	千歳市
C08	市民憲章像	真町 青葉公園	平成 3 年 7 月 20 日	千歳市
C09	千歳市都市宣言塔	北栄 2	平成 4 年 3 月 31 日	千歳市
C10	指宿市千歳市姉妹都市提携記念植樹碑	真町 青葉公園	平成 6 年 8 月 6 日	千歳市
C11	千歳の姉妹都市碑	東雲町 2 市役所前庭	平成 6 年	千歳市
C12	アンカレジパーク門標	青葉丘	平成 11 年	千歳市
C13	市民憲章像「愛」原形	北栄 2 市民文化センター	2001 年 7 月 1 日(平 13)	千歳市
C14	J8サミット開催記念ボード	北栄 2 市民文化センター	平成 20 年 7 月 6 日	千歳市
C 15	秦一明墓石	末広 末広第 1 霊園	明治 17 年	

J 顕彰に関するもの

J 01	溝口五左衛門之像	住吉1	昭和4年5月26日	高島家
J 02	記念碑	根志越 根志越八幡宮	昭和13年4月	根志越町内会
J 03	鈴木六三郎像	中央410 鈴木秀明宅	昭和16年7月	鈴木家
J 04	神社地寄贈記念碑	協和 協和神社	昭和33年9月18日	協和連合会
J 05	鈴木梅四郎翁頌徳碑	水明郷 王子製紙第一発電所	昭和35年9月	王子製紙苫小牧工場
J 06	渡部栄蔵翁像	本町3	昭和41年11月3日	渡部家

K 企業・団体等に関するもの

K 01	麒麟像	上長都949 キリンビール千歳工場	昭和56年3月	キリンビール千歳工場
K 02	記念樹いちい碑	北栄2 市民文化センター前	昭和60年5月30日	千歳ロータリークラブ
K 03	巣立ち像	真町 青葉公園	昭和62年8月12日	千歳ライオンズクラブ
K 04	近藤メモリアル	上長都949 キリンビール千歳工場	1991年 (平3)	キリンビール千歳工場
K 05	友好記念植樹碑	花園2 サーモンパーク	1993年6月 (平5)	千歳中央ライオンズクラブ
K 06	二宮尊徳像	高台5 JA 道央千歳支店前	平成10年7月	JA 道央千歳支店
K 07	鮭蟹供養碑	泉沢1007 佐藤水産	平成11年10月	佐藤水産
K 08	市の木かつら碑	北栄2 市民文化センター前	平成19年9月21日	千歳中央ライオンズクラブ

L その他

L 01	千歳川会所跡碑	本町1 舟生宅前	昭和54年6月	千歳神社
L 02	フレトヒのチャシ趾標	真町 千歳神社境内	昭和54年6月	千歳神社
L 03	石勝線 Oキロ標	柏台南1 JR 南千歳駅	昭和56年10月1日	JR 北海道
L 04	新渡戸稲造記念碑	千代田町4 グリーンベルト	昭和60年11月3日	千歳市
L 05	筆塚碑	真町 千歳神社境内	昭和62年	千歳神社
L 06	サーモン橋レリーフ	花園・住吉 サーモン橋	昭和62年11月	千歳市
L 07	川村濤人歌碑	支笏湖温泉2 支笏湖小学校	1990年9月(平2)	歌碑建立実行委員会
L 08	北国通信撰文塔	千代田町7 JR 千歳駅前	平成12年4月(現況へ)	千歳市
L 09	登山安全祈願碑	幌美内 恵庭岳登山口	昭和3年5月17日	

※ 建立年月日は石碑等に刻まれたとおりに記載したが、西暦年号については元号を()に付記した。

G 空港に関するもの

G01	千歳空港門標	美々 道道130号脇	昭和37年10月	札幌開建千歳空港事業所
G02	千歳飛行場を造った村民顕彰の碑	柏台南1 空港公園	平成8年9月21日	千歳市
G03	「北海」一号機模型(ブロンズ)	柏台南1 空港公園	平成8年9月21日	千歳市
G04	「北海」一号機操縦士之像	柏台南1 空港公園	平成14年10月22日	千歳市
G05	北海一号復元模型飛行機	蘭越 蘭越浄水場管理棟	平成18年4月25日移設	千歳市(平4、作製)

H 宗教・信仰に関するもの

H01	墓 石	清水町1 千正寺	安政2年5月(1855)	千正寺
H02	太平山碑	幌美内	明治5年	千歳市
H03	五神名塔	根志越 根志越八幡宮	明治33年3月1日	根志越町内会
H04	山神碑	長都 長都神社	明治38年11月15日	長都町内会
H05	馬頭観世音碑	清水町3	昭和35年10月	八大竜王大自然愛信教団
H06	極楽寺開基之碑	泉郷480 極楽寺境内	昭和36年9月25日	極楽寺
H07	供養塔	末広 末広第1霊園	昭和41年12月2日	千歳市
H08	千歳市慰霊塔	北信濃830 蘭越共同墓地	昭和53年5月8日	千歳市

I 学校関係

I 01	二宮金次郎像	本町3-4 千歳小学校	昭和14年3月14日	千歳小学校
I 02	二宮金次郎像	支笏湖温泉2 支笏湖小学校	昭和38年5月	支笏湖小学校
I 03	開校七十周年記念碑	駒里945 駒里小中学校	昭和51年10月	千歳市
I 04	柏葉像	栄町4-35 千歳中学校	1977年10月23日	千歳中学校
I 05	閉校之碑	新星2 新星公園	昭和53年3月	千歳市
I 06	足あと百年碑	本町3-4 千歳小学校	昭和53年10月15日	千歳小学校
I 07	大空像	緑町4-28 緑小学校	昭和58年3月15日	緑小学校
I 08	融和	北斗5-1 北斗中学校	昭和59年4月	北斗中学校
I 09	日時計 大ききはばたけ末広っ子	富丘2-6 末広小学校	昭和60年4月	末広小学校
I 10	未来への輪	若草5-5 向陽台中学校	1987年4月 (昭62)	向陽台中学校
I 11	千歳第三小学校跡碑	上長都 キリンビール千歳工場	平成7年3月	記念碑建立実行委員会
I 12	悟りの門・学びの庭	美々 千歳科学技術大学	平成10年4月	千歳科学技術大学
I 13	美々学園通りモニュメント	美々 千歳科学技術大学	平成10年4月	千歳科学技術大学
I 14	千歳市立中央小中学校跡地碑	中央539 旧校舎跡	平成12年3月	千歳市
I 15	長都小中学校百周年記念植樹標	長都42 旧校地跡	平成13年9月7日	千歳市
I 16	二宮尊徳像	北栄1 北栄小学校	平成23年6月	北栄小学校
I 17	千歳市立真町中学校閉校記念碑	真々地2-3-1	平成23年11月	閉校記念事業実行委員会

石碑等分類別・年代別一覧 (太ゴシック体は新たに追加した石碑等)

分類 時期	A 皇室関係	B 戦争関連	C 市政市史	D 開拓開発	E 家畜供養	F 鯉鱒関係	G 空港関係	H 信仰宗教	I 学校関係	J 顕彰関係	K 企業団体	L その他
江戸期								H01				
明治期	A01	B01 B02	C15					H02 H03H04				
大正期					E01							
昭和～9年	A02				E02					J01		L09
昭和10年代	A03	B05		D01	E03 E04E05 E16	F01			I01	J02 J03		
昭和20年代												
昭和30年代	A04 A05	B03	C01 C02		E06		G01	H05 H06	I02	J04 J05		
昭和40年代	A06			D02 D03 D04	E07 E08 E09 E10	F02		H07		J06		
昭和50年代			C03 C04 C05 C06 C07	D05 D06 D07 D08	E11 E12 E13 E14 E15			H08	I03 I04 I05 I06 I07 I08		K01	L01 L02 L03
昭和60年代				D09 D10 D13					I09 I10		K02 K03	L04 L05 L06
平成～9年		B04	C08 C09 C10 C11	D11 D12		F03	G02 G03		I11		K04 K05	L07
平成10年代			C12 C13				G04 G05		I12 I13 I14 I15		K06 K07 K08	L08
平成20年代			C14						I16 I17			

A 01 駐蹕之地碑

(碑石正面 タテ)

駐蹕之地

北海道廳長官 正四位勲二等 河島醇 謹書

(由緒碑正面 タテ)

千歳村 明治天皇聖蹟ヲ私人ノ所有ヨリ村ニ移管セシコトニツキ其ノ顛末ヲ録シ之ヲ後昆ニ傳ヘントシテ予ニ之ヲ囑セララル 抑々舊所有者新保鐵藏ハ明治五年青森縣ヨリ千歳村現住地ニ移住シ旅館ノ業務ニ従事シツツアリシガ明治十四年九月二日畏クモ 明治天皇北海道御巡幸ノ御御泊行在所タルノ光榮ニ浴シタリ 千歳村ハ之カ聖蹟ヲ永久ニ記念ス可ク明治四十二年九月御駐蹕記念碑ヲ建テ之ヲ守護シ来レリ 偶々昭和九年大坂市ノ人水谷政次郎此ノ地ニ来リテ聖蹟ヲ拜スルヤ感激措ク能ハススル聖域ハ之ヲ村ニ寄附シ村ニ於テ保存ノ方途ヲ講スルハ克ク其ノ光榮ヲ永久ニ傳フル所以ナルヲ以テ速ニ適當ノ措置ヲ執ランコトヲ勸説セルニ當主鐵太郎モ其ノ趣旨ニ贊同シ聖域百三十坪ノ寄附ヲ村ニ申出デタリ依ツテ村ハ直チニ村會ノ議決ヲ經テ之ヲ受納シ永ク其ノ守護ニ任スルコトナレリ洵ニ時宜ニ適セル措置ト謂フ可シ 顧フニ明治天皇ノ本道御巡幸ハ既ニ五十余年ノ昔トナレリト雖モ當村ニテハ此ノ聖蹟アルニヨリテ村民日々其ノ追憶ヲ新ニシ常ニ尊皇愛國ノ赤誠ヲ養ヒ盡忠報國ノ熱情ニ燃エツツアルヲ見ル眞ニ欣羨ニ堪ヘサル所ナリ 後昆克ク其ノ由來ヲ明カニシ益々聖蹟ノ守護ニ協力スル所アル可シ 予曩ニ北海道廳長官ニ在リシノ故ヲ以テ茲ニ其ノ顛末ノ概要ヲ記スルノ任ニ當リタルコトハ予ノ最モ光榮トスル所ナリ

昭和十一年七月一日

正四位勲二等 佐 上 信 一 撰

(由緒碑背面 タテ)

昭和十一年九月二十六日 千歳村 建之



平成 21 年 7 月 31 日 撮影



現況 平成 25 年 10 月 24 日 撮影

A 02 報恩碑

(碑石正面 タテ)

報 恩 碑

北海道廳長官從四位勲三等 池田秀雄

(碑石背面 タテ)

昭和五年九月 辛巳保護會建之

(台座正面 タテ 一〇文字一〇行)

明治天皇北海道御巡幸
之際明治十四年九月二
日我千歳村荷御駐蹕之
光榮我等種族亦得拜曠
古之盛事且畏賜酒肴料
嗟仁澤廣大與天日無窮
矣今茲昭和五年九月當
行御巡幸五十年記念祭
同族相謀建此碑所以欲
霑洽之皇恩傳于子孫也



(台座背面 タテ)

發起人

今泉柴吉
小山田菊次郎

中本幸平

小山田彦一

小山田治郎太

小田六太郎

世話人

鹿目徳親

渡部榮藏

三海龜藏

辛巳保護會

會員一同



A 03 野外統監部御跡碑

(碑石正面 タテ)

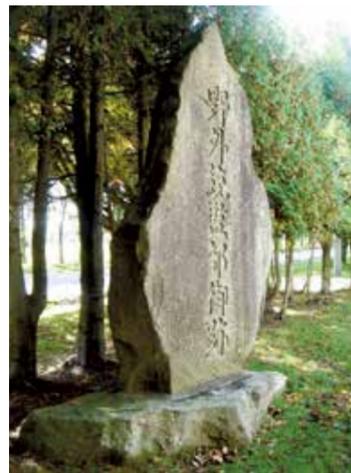
野外統監部御跡

北海道庁長官従四位

勲二等 池田清謹書

(碑石背面 タテ)

昭和十一年十月四日 千歳村



A 04 天皇后行幸啓記念之碑

(碑石正面 ヨコ)

昭和廿九年八月廿三日十一時五十分

天皇陛下

行幸啓記念之碑

皇后陛下

一條實孝 謹書



A 05 植樹祭記念碑

(碑石正面 タテ)

御製

ひとひとと

あかえそ松の

なへうえて

みどりのもりに

なれといのり

つ

(碑石背面 タテ)

昭和三十六年五月二十四日

天皇后兩陛下のご臨席を

あおぎ山水清秀のこの地に於て

第十二回植樹行事が行われ

アカエゾマツ三万六千本を植栽

した よつてここに碑を建て

永くこれを記念する

昭和三十七年五月二十四日

北海道知事 町村金五

(台座正面 真鍮製解説板貼付 タテ)



A 06 御下賜記念碑

(千歳いずみ学園門標背面 タテ)

今般その事業御奨励の

思召をもって金一封を

下賜せられましたこの旨

お伝え致します

昭和四十九年四月二十九日

宮内庁長官 宇佐見 毅

社会福祉

法人

千歳いずみ学園殿



御下賜記念碑
千歳市錦町 遠藤浅夫氏
の寄進により建立する
大島魯舟謹書

B 01 凱旋記念碑

(碑石正面 タテ)

明治三十七八年役 出征軍人

森井平三郎

松原清之助

彦坂里次郎

中野作次郎

森井金藏(城?)

福永政人

今井金次郎

山城鶴次郎

本郷徳次郎

凱旋記念碑

(碑石右側面 タテ)

明治三十九年三月建之

ケヌフチ青年會



B 02 忠魂碑

(碑石正面 タテ)

忠魂碑

陸軍歩兵大佐従五位勲四等功三級 稲村新六書

(碑石背面 タテ)

日露役戦死者

陸軍歩兵上等兵勲八等功七級

本郷徳次郎

元谷立之助

土谷郡次郎

桑島房吉

山田惣太郎

吉田定吉

佐々木五郎

陸軍伍長勲八等功七級

陸軍上等兵

陸軍兵長

海軍一等水兵

海軍二等兵曹

海軍上等兵曹

海軍水兵長

海軍整備兵長

海軍上等水兵

片岡友次
田中義秀
末永三夫
生田則明
堀 隆司
関口清治
樺沢武松
高橋賢一



B 03 招魂碑

(碑石正面 タテ)

招魂碑

(碑石背面 タテ)

陸軍中将 國崎登謹書

昭和三十三年※※月建之 齊藤正三

※二字剥落により判読不能



B 04 恒久平和祈念の碑

(碑石正面 タテ)

恒久平和記念の碑

過去の戦争で尊い犠牲となられた

戦没者の方々をこの碑に刻み

若い世代に命の尊さを語り継ぎ

再びあの悲しみを繰り返さないよう

誓いを新たにこの碑を建立します

平成六年十月

千歳市遺族会



(台座背面下部 ヨコ)

関係資料埋蔵

設置者 千歳市遺族会会長 阿部常夫

竣 功 平成6年10月29日

揮 毫 伊藤泰洞

施 工 ウェストン株式会社 代表取締役 続 寿

(碑石背面 タテ六段) 千歳市戦没者 ①

(一段目)

青木一雄 伊東幸四郎 遠藤忠之助
 荻谷己代一 伊藤豊吉 遠藤満枝
 安宅一義 伊藤力男 大崎 巖
 穴田幸治 稲田政男 大島 誠
 阿部節夫 井上輝雄 大谷 巖
 阿部竹次 今井 進 大塚幸平次
 阿部照雄 今村武雄 大島正勝
 天坂留蔵 入澤俊雄 大町益司郎
 安保直見 岩本留蔵 大宮光信
 安保清吉 岩本直一 大村次夫
 飯間文爾 岩本 嘉 小笠原久雄
 生田則明 岩室庄一
 池 久雄 上枝 繁
 池 源作 上田元吉
 池谷金吉 上羽順一
 池田義一 宇佐美波一
 池永松蔵 牛嶋儀一
 石川喜市 臼井 孝
 石川政弘 臼井正雄
 石田 強 打矢 忠
 和泉義明 江藤 一
 伊藤源次郎 圓館伍三郎

(二段目)

尾形定雄 加藤秀雄 木村定一
 岡田 豊 金子春一 木村義男
 岡部春雄 鎌田康夫 木谷由太郎
 小川秀市 小川秀市 樺沢武松
 沖中明義 川合 仁 清田 久
 奥田爲蔵 河上信夫 工藤貞雄
 奥田秀男 奥田文洞 工藤敏友
 奥村文洞 奥山 勇 川島二作
 奥山 勇 小田力蔵 河田 實
 落合勝一 落野正雄 川又健一
 落野正雄 小野寺栄吉 河本正隆
 小山田武松 利部 清 喜瀬 勇
 柿崎昭二 笠谷武夫 菊地猛七
 片桐武雄 片倉保雄 北川光義
 片岡友次 片岡友次 北村忠憲
 勝俣弥一 木下小一
 加藤惣太郎 木村喜一郎

(三段目)

小嶋 武 坂本義雄 柴垣勇蔵
 小玉二郎 佐々木潔 洪田芳政
 小林重造 佐々木五郎 清水勝蔵
 小松崎繁 佐々木春男 清水武雄
 今 克之 佐々木誠 白木二郎
 今 哲 佐々木三作 数珠茂雄
 今 末彦 佐々木宗朗 新保鉄美
 今 竹三郎 佐々木芳元 杉田繁雄
 今 吉雄 佐藤勝太郎 鈴木 功
 近藤國定 近藤三郎 佐藤三郎 鈴木米作
 近藤 博 佐藤惣三郎 鈴木六市
 近藤松吉 佐藤 正
 齋藤謙造 佐藤忠弘
 齊藤武雄 佐藤忠雄
 坂井 担 佐藤輝弘
 酒井 博 佐藤正雄
 榊 岩雄 佐藤 俊
 佐田 清 佐藤義雄
 坂田幸男 澤尻 孔
 坂元龍雄 澤尻 克
 坂本 正 式部弟二郎
 坂本洋吾 品川清治

(碑石背面 タテ六段) 千歳市戦没者 ②

(四段目)

末永三夫 田中弥衛太 中村安司
 末廣伊助 田中義秀 中村義美
 角 徳次 谷村友吉 中本市太郎
 諏訪 功 田卷正蔵 中山正樹
 関 顕 田村泰司 奈良定吉
 関 薫 丹野運吉 成兼俊男
 関口清治 千船挑一 西尾岩男
 曾根正義 辻村勝敏 西野義一
 曾根勝義 堤 治男 西村良一
 平金次郎 土谷郡次郎 二瓶 弘
 高嶋寛二 富永 昇 野崎時正
 高田隆司 土門満子
 高遠幸雄 豊沢重徳
 高橋金治 中川勝秋
 高橋賢一 中添 清
 高橋貞義 中辻美之一
 高橋繁雄 中鉢喜書志
 滝川順一 中鉢幸男
 武田栄作 中浜嘉市
 多田静雄 中尾孝作
 只石 誠 長沼敏雄
 田中榮一 中村音松

(五段目)

野田庄治 藤森千穂 南 定雄
 野々村弘 藤原市治 南 寛
 野村政雄 藤原幸作 南 元義
 芳賀一二 細澤一夫 宮森雄吉
 長谷川正基 堀 隆司 三宅 茂
 橋本熊太郎 堀本逸員 宮本榮次
 橋本義明 本田正義 宮本峯夫
 間 豊 本田信一 武藤季雄
 林久米太郎 本田義弘 武藤キヤ
 早川 稔 本郷徳次郎 村上金之助
 平田正信 前田利郎 村上由松
 平間房雄 前田秀喜
 平間亮吉 前田 昇
 広野正一 正野武七
 広野忠一 間澤健一郎
 福田重雄 松倉光男
 藤根運蔵 松田虎蔵
 藤根種吉 松原一男
 藤村虎吉 万名 寛
 藤本歳勝 三浦正男
 藤本文勝 三津谷藤樹
 藤本光二 道原盛夫

(六段目)

村田 正 山野辺得男
 村田 実 山本政夫
 村田正雄 横田虎彦
 村中太市 横山 保
 元谷立之助 由川義雄
 森近市郎 吉田定吉
 初山忠太郎 吉田清一
 八重柏恒治 和田健太郎
 八木孝一 和田義雄
 安田金一郎 渡 三次郎
 山内 平 渡辺哲也
 山内武雄 渡邊由四郎
 山内義弘 渡邊義雄
 山岡清松 達見 公
 山形與作 細川昭三
 山川 勲
 山口芳夫
 山田惣太郎
 山田福蔵
 山田萬吉
 山田四四三
 山根豊三

(注) 1~5 段目 各 55 名 6 段目 37 名 計 312 名

B 05 長都記念墓石 (二基)

長都共同墓地

一 元谷立之助上等兵墓石 (写真玉垣内右側)

(竿石正面 タテ)

勲八等

故 元谷立之助之墓

功七級

(竿石左側面 タテ)

第七師團歩兵二十五聯隊故陸

軍歩兵上等兵征露從軍中明治

三十七年十二月二十七日於テ清

国金列廳下大講戦死歳二十六

(竿石背面 タテ)

昭和十一年五月建之 元谷正義

(竿石右側面 タテ)

法名 釋勇誓

元谷立之助上等兵が前線から家族にあてた手紙



竿石:黒御影石 H:110 W:40 D:38

芝台含む全体の高さ H:253 (cm)

二 土谷郡次郎上等兵墓石 (写真玉垣内左側)

(竿石正面 タテ)

故勲八等上等兵土谷郡次郎之墓

(竿石左側面 タテ)

第七師團歩兵第二十五聯隊歩兵上等兵明治三十七年

十月二十日征露從軍屯營出發同年十一月二十日大連

上陸同年十一月三十日支那國旅順口赤坂山於戦死

大正八年二月建之 土谷彌之進

(竿石右側面 タテ)

法名 釋勇進

(玉垣右側門柱石正面 タテ)

陸軍特別大演習記念

(同 背面 タテ)

三十三年忌

(玉垣左側門柱石正面 タテ)

昭和十一年

四月二十九日竣工

南長都分團



竿石:札幌軟石 H:140 W:39 D:36

芝台含む全体の高さ H:264 (cm)

C 01 市民の像

(台座正面 ヨコ)

千 歳 市 民 憲 章

世界をつなぐ北の大空。
千歳川の清い流れ。
開拓ここに一世紀。

私たちは誇りある千歳市民です。
郷土の発展とお互いのしあわせを
願ひこの憲章をかかげて力強く
前進を続けます。

- 1、心身をきたえ仕事にはげみ
明るく若々しいまちにしましょう。
- 1、自然を愛し季節に親しみ
快よく楽しいまちにしましょう。
- 1、きまりを守り力を合わせて
美しく住みよいまちにしましょう。
- 1、年よりを敬い子供の夢をはぐくみ
温かく平和なまちにしましょう。
- 1、文化を育て希望にみちた
豊かなおちついたまちにしましょう。

昭和 54 年 7 月 1 日制定

市 民 の 像

(台座左側面ヨコ)

(台座背面 タテ)

市民の像建設の趣意

千歳市の過去の歩みを回顧し諦

思し変貌する現実の姿を直視し

未来に向って平和な国際空港都

市への飛躍と観光都市への発展と

を祈念して市民有志並び一般の寄進

と市の助成を得期成会関係者の努

力を集め一九六一年八月十三日彫刻家

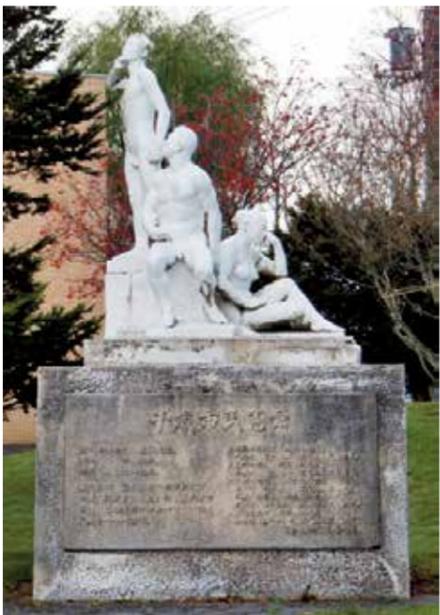
竹中敏洋氏の製作によりここに建つ

田代梧洞書

山本芳久刻

1961.5 たけなかとしひろ

(腰掛台左側面 ヨコ)



C02 交通安全宣言都市碑

(正面背面ともに同型 ヨコ)

交通安全宣言都市

(碑石上部に横長の鉄板取付け ヨコ)



千歳ライオンズクラブ

C03 千歳市政浄化有志会記念之碑

(碑石正面 タテ)

千歳市政浄化有志会記念之碑

(碑石背面 タテ)

浄化有志会設立会長 今与自郎死後老年目

昭和五十二年十月吉日

本人の意を対し遺族建立



C04 千歳市開基百年記念碑

(碑文銘板 タテ)

碑 文

明治十三年(西暦一八八〇年)千歳郡千歳村に、千歳村外五カ村戸長役場が置かれ、石山専蔵殿が初代戸長に就任してからここに百年を迎える。

千古斧鉞を加えず、昼なお暗い密林に開拓の鋤を振るい、街づくりを行った先人の労苦は、まさに筆舌に尽し難いものがある。

今や、千歳市は人口六万五千余人を擁し、北海道における空陸交通の拠点となり、産業の発展もまた著しいものがある。

この間、自治行政に、教育文化に、福祉、産業の振興に尽瘁され、名誉市民の称号が贈られた。

故中川種次郎殿

故渡部栄蔵殿

故山崎友吉殿

故伊藤 弘殿

吉田信一殿

の偉業を讃え、更に二世紀へ向つての躍進を念願し、ここに市民の浄財により、開基百年記念碑を建立する。

昭和五十四年八月四日



千歳市長 東峰元次書

(建設趣意書銘板 タテ)

この碑は千歳市開基百年を記念し、市民の総意にもとづいて建設したものであります。建設費は民間組織である「千歳市開基百年記念碑を建てる市民の会」を設立し、広く市民並びに企業団体等と呼びかけ、浄財を得て建設したもので、寄付者名簿及び記録はこの記念碑の中に保存いたしました。

昭和五十四年八月四日

千歳市開基百年記念碑を建てる市民の会

米田忠雄

C05 市民の森開基百年記念植樹標

(正面 タテ)
市民の森開基百年
記念植樹



C06 タイムカプセル

(台座正面 左 ヨコ)

この球体は、西暦1979年千歳市開基百年を記念し作製したもので、市の歴史と現況を後世に伝える資料が収納されております。
現代から未来へのかけ橋にして、100年後の市民への贈り物にいたします。

C06 タイムカプセル

(上斜面 球体の下部 ヨコ)

1979~2079
〈市章〉



この球体は、千歳市名誉市民故伊藤弘殿の遺族から寄付せられたものであります
1979年12月15日
千歳市長 東峰元次

(台座正面 右 ヨコ)

C07 ツルのモニュメント

※刻文等なし

C08 市民憲章像

- (像 五体 右から)
- ① 女性像 「自然」
 - ② 男性像 「連帯」
 - ③ 母子像 「愛」
 - ④ 男性像 「健康」
 - ⑤ 女性像 「希望」

(台座背面下部 タテ)
製作 鈴木吾郎 平成三年七月

趣意書碑 (本型 ヨコ)

(左ページ)

千歳市民憲章
世界をつなぐ 北の天空
千歳川の 清い流れ
開拓 ここに一世紀

私たちは、誇りある千歳市民です。
郷土の発展と、お互いのしあわせを願い、
この憲章をかかげて、力強く前進を
続けます。

- 一 心身をきたえ、仕事にはげみ、
明るく 若々しい まちにしましょう
- 一 自然を愛し、季節に親しみ、
快く 楽しい まちにしましょう
- 一 きまりを守り、力を合わせて、
美しく 住みよい まちにしましょう
- 一 年よりを敬い、子供の夢をはぐくみ、
温かく 平和な まちにしましょう
- 一 文化を育て、希望に満ちた、
豊かな おちついた まちにしましょう

昭和五十四年四月一日制定

(右ページ)

千歳市民憲章像 建設の趣意

この千歳市民憲章像は、市民憲章
制定十周年 ならびに 千歳市開基
百十年を記念して建てたものである。
憲章に掲げる五つの目標を それ
ぞれ「健康」「自然」「連帯」「愛」
「希望」のテーマで象徴している。
千歳市の恵まれた自然を誇りとし、
先人の労苦に感謝するとともに、世界
平和を祈念し、千歳市の輝かしい未来
への発展を誓い、ここに記念事業と
して取り組んだものである。

千 歳 市
千歳市民憲章推進協議会

平成三年七月二十日

(1 段目)

交通安全都市宣言

産業、経済、文化の著しい発展向上に伴う車両交通の増加により、交通事故は年々増加の傾向にあり、大きな社会問題となっている。

これらの交通による悲惨な事故を防止し、市民生活の安全を守るためには、交通環境の改善を図るとともに、全市民が交通安全の自覚に徹することが必要である。

よって、千歳市は、関係機関の総力を結集し、全市民の一致協力のもとに安全運動を強力に推進し、交通事故のない明るい都市の建設を期し、ここに千歳市を「交通安全都市」とすることを宣言する。 昭和 37 年 3 月 12 日

(2 段目)

清く明るく正しい選挙都市宣言

選挙は、民主政治の基盤であり、民主政治の健全な発展と確立のためには、選挙が清く明るく、かつ正しく行われなければならない。

民主政治確立のため、本市議会は全市民の期待と熱意を結集し、ここに清く明るく正しい選挙を推進する都市たることを宣言する。 昭和 41 年 12 月 22 日

(3 段目)

青少年健全育成都市宣言

千歳市は、時代を託すべき青少年が、風雪百年輝く未来を自ら開き、明るく豊かな未来を自ら開き、明るく豊かな郷土を建設、職業に誇りを持ち、人間性豊かにして自主性を有し、心身ともに健全にして創造的かつ新しい文化的、民主主義的社会建設の担い手となるよう生長することを願い、地域の大人達は、自ら姿勢を正し、青少年に愛の手を注ぎ、明るい家庭と環境づくりに力をつくし、全市民の総意を結集して、健全育成につとめることを決意し、ここに「青少年健全育成都市」たることを宣言する。 昭和 43 年 3 月 27 日

(4 段目)

スポーツ都市宣言

私たち千歳市民は、スポーツを愛し、スポーツを通じて健康でたくましい身体をつくり、豊かで明るい郷土を築くため、次の目標を掲げて、ここに「スポーツ都市」を宣言する。

(1) 市民すべてがスポーツを楽しみましょう。

(2) 力をあわせてスポーツのできる場をつくりましょう。

(3) 時代を担う青少年のため、地域にも職場にも、スポーツの機会をつくりましょう。

(4) スポーツを通じて、世界の人々と手をつなぎましょう。 昭和 45 年 6 月 29 日



提携 平成6年4月15日
 植樹者 指宿市長 川原迫 要
 千歳市長 東川 孝
 指宿市議会議長 川畑 勲
 千歳市議会議長 山口貞四郎

(碑石背面 ヨコ)

指宿市
 姉妹都市提携記念植樹
 千歳市
 平成6年8月6日



<市章>千歳の姉妹都市
 SISTER CITY (*右側に合衆国地図)
 <市章>1969年提携: アンカレジ市
 ANCHORAGE, U. S. A
 <市章>1994年提携: 指宿市
 IBUSUKI, JAPAN

(※右下)
 <鳥の絵> 翠鳥 Pied Kingfisher
 <花の絵> 花菖蒲 Japanese Iris
 ヤマセミ ハナショウブ

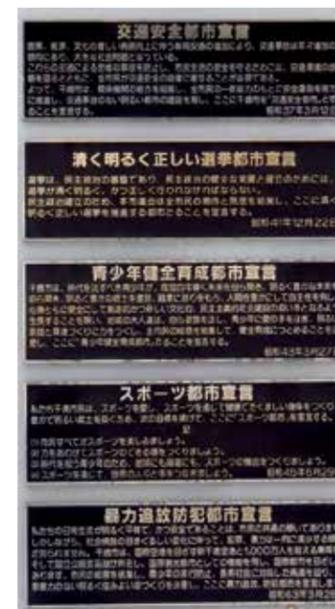
C10 指宿市千歳市姉妹都市提携記念植樹碑
 (碑石正面 ヨコ)

C11 千歳の姉妹都市碑
 (碑石正面 ヨコ)

(5段目)

暴力追放防犯都市宣言

私たちの日常生活が明るく平穏で、かつ安全であることは、市民の共通の願いであります。しかしながら、社会情勢の目まぐるしい変化に伴って、犯罪、暴力は一向に減少する傾向が見られません。千歳市は、国際空港をみざす新千歳空港と1,000万人を超える乗降客、そして国立公園支笏湖が所在し、国際観光都市としての機能を有し、国際都市をみざしております。市民の総意を結集し、青少年の非行防止、長寿社会に対応した高揚を図り、犯罪暴力のない明るく住みよい街づくりを決意し、ここに暴力追放、防犯都市を宣言します。
 昭和63年3月28日





愛
千歳市民憲章像原形
制作・寄贈者 鈴木吾郎

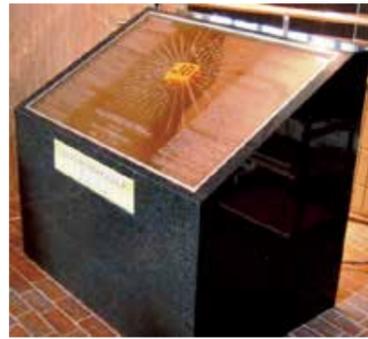
この像は1991年に青葉公園内に設置された「千歳市民憲章像」(健康、自然、連帯、愛、希望)の内「愛」の原形です。

2001年7月1日

(母親像の左足もとに制作者のサイン)

90.8

Goro. S



J8サミット2008千歳支笏湖に集まった39名の参加者により地球の未来のため世界に発信された「千歳宣言」を後世に継承します

平成20年7月6日

J8サミット千歳支笏湖市民実行委員会会長

千歳市長 山口幸太郎 (この行、自署)

J8サミット2008 千歳支笏湖
「千歳宣言」

C13 市民憲章像「愛」原形
(台座正面 ヨコ)

C14 J8サミット開催記念ボード
(上面ボード)
中央に参加者三九名のサイン(カラ傘形に)
右側に日本語、左側に英文の「千歳宣言」を記載
(サインの下に ヨコ)
(台座正面 ヨコ)

アンカレジパーク
ANCHORAGE PARK



〈市章〉 アンカレジ パーク

Anchorage Park

アンカレジ市はアメリカ合衆国アラスカ州の中南部に位置するアラスカ最大の都市です。アラスカの大自然のふとこにいだかれたアンカレジ市では、キングサーモンやムースなどの野生動物を多く見ることができる一方、市街地は基盤の目のように整然と区画されており、色とりどりの花々で飾られています。

夏は白夜となって夜遅くまで太陽が輝き、雄大な自然の中で釣りやキャンプ、サイクリングなどのアウトドア活動を楽しむことができます。アラスカの空を美しいオーロラが漂う冬には、スキーなどのウィンタースポーツが楽しめるほか、犬ぞりレースなどのイベントも数多く開催されています。

昭和44年(1969年)、千歳市とアンカレジ市は、日米両国間の友好親善や、両市の産業、経済、文化の交流推進を目的に姉妹都市提携の盟約を結びました。以来、多くの市民の熱意と努力により友好の輪は年々広がり、スポーツ交流やイベント交流、友好使節団をはじめとする訪問団の相互派遣などの事業が実施されています。

平成11年(1999年)には姉妹都市提携30周年という節目の年を迎え、両市の長きにわたる友情を記念し、同年オープンしたこの公園がアンカレジパークと名づけられました。

※上記文章の右にアンカレジ市の位置を表示した合衆国の地図を記載。

また、日本語と地図の下に英文を併記。

C12 アンカレジパーク門標
(門標 ヨコ)

(園内解説板 ヨコ)

C 15 秦一明墓石

稲穂二丁目十五 末広第一霊園

(墓石正面 タテ)

光雲院一山秦明居士

(墓石背面 タテ)

明治十七年八月九日

俗名 秦 一明

(趣意書碑正面 タテ)

二代目戸長秦一明を讃えて

千歳市は明治十三年三月に千歳郡各村戸長役場を開設して今年で開基一〇年を迎えました

この千歳草創期に今日の基礎を築いた二代目戸長秦一明は文政十一年二月(一八二八)伊予国新居郡植木村(愛媛県西條市)に生まれ 函衛隊長 函館税関吏等を歴任し明治十

三年十月(一八八〇)千歳郡各村戸長に任命されました在任中は千歳教育所の創立 明治天皇の行幸をお迎えする等

数々の業績を残し明治一七年八月(一八八四)現職のまま病死されました

ここにその功績を讃えるため寄せられた浄財をもとに墓碑の改

修及び記念事業を実施しました

市民の暖かい善意とご協力で深く感謝申しあげます

平成元年八月八日

二代目戸長秦一明を讃える会

会長 東川 孝



竿石:札幌軟石 H:123 W:40 D:30 (cm)

台石 3段とも 札幌軟石 高さ計 H:95

上台 H:30 W:63 D:47 下台 H:28 W:112 D:90

趣意書碑石:御影石 H:61 W:74 D:7

協賛者名簿碑石:御影石 H:75 W:147 D:9



(協賛者名簿碑 タテ書き四段) 秦一明を讃える会協賛者

(一 段 目)		稲田一夫	紙栄佐男	後藤満男	佐藤好弘	田代智彦	西尾和子	藤本光二	三好憲彦
へ三ふじや	岩崎光子	神野昇	小林穰	里見季子	田中哲	二瓶幸雄	藤本敬一	毛利信之	
東川 孝	内村ナツ	神谷妙子	小松裕	塩原勇	田中陽子	野口剛志	藤本恒男	元道種男	
羽山石材店	内山征児	亀山隆	今晴美	洪田晃	谷俊幸	野田貢	藤本治康	森寿次郎	
新保義美	梅尾一馬	鴨林豊一	金雅志	島倉充平	玉置武	野原誓一	舟生博	森尾尚之	
太平洋石油	梅尾要一	川越一雄	小山紘	嶋崎正嗣	高須賀啓次	信田茂	福山建志	守屋憲治	
千歳土建	梅沢健三	川端正裕	斎藤一明	下野義郎	千歳印刷	野元和光	北海道銀行	守屋光利	
広重孝徳	N T T千歳	川村幸雄	斉藤公彦	白木敏滋	千歳民報社	長谷川朝雄	北海道電力	八木商店	
伊藤安江	大谷利夫	神藤徹	新山修	新山修	千葉英夫	長谷川勝二	(五 段 目)	山口貞四郎	
丹波組	大谷敏三	菊地幸子	斉藤博司	尚和	津坂富士雄	長谷川和子	益田邦彦	山口吉弘	
本宮義輝	大林惇	喜多成治	斉藤征義	神出設計	津沢亮	島山憲昭	松井修一	山崎徳雄	
青葉学園	大村忍	北岡栄吉	坂井治	新保清子	堤勲	服部久恵	松浦堅治	山沢栄子	
赤間重昭	岡崎宗男	北山真一	坂井キヨ	新保三千男	(四 段 目)	林元一	松岡信之	山田幸子	
朝倉範夫	小笠原幸雄	キッコーマン	榎原潤	菅原文弥	寺山恵美子	原美文	松田傳知	吉田昇	
朝日生命	沖中環夫	木滑茂雄	榎原武雄	杉森一身	戸田泰介	波多野勝	松田亮	米沢勝義	
浅見朝子	奥野文蔵	木村和夫	坂本捷男	瀬川賢	富田健治	東川信雄	松屋和義	若林聖子	
芦沢繁雄	長見義三	木村みつえ	(三 段 目)	大栄建築設計	富田敏子	東川修	丸山猛	和田明彦	
粟野広幸	落合幸四郎	木谷稔	佐々木勝利	高慶繁博	土門利也	東川洋	水田正三	渡部昭	
石井博美	小野丈夫	キリンビール	佐々木新市	たぐん	中川滋	東川孜	水谷洋三	渡辺邦雄	
石川美鈴	開発一美	金歳堂	佐々木直	高師貞吉	中里和夫	東山聖二	水野敏和	渡辺得二	
伊藤木材店	(二 段 目)	クリーン開発	佐々木哲夫	高橋徳夫	中塚兼昭	平沖孝行	三谷宣義	渡辺信幸	
伊東秋男	蠣崎広信	桑島洋志	佐々木俊英	高橋知夫	中出清孝	広重栄三	南知秀	渡辺裕子	
今井 功	景山 豊	光 健	佐々木三夫	高塚興正	中出英利	広重裕康	三原 修	平成元年八月八日	
今井 武	梶浦康弘	後藤京子	佐藤利雄	高野幸作	成田時子	藤川寿夫	宮沢一成	春翠書	

1~3 段目:各 43 名 4 段目:37 名 計 209 名

D 01 農國基碑

(碑石正面)

(題字 右からヨコ書き)

農國基

(碑文 タテ)

第二期北海道拓殖計畫ニ基キ自作農創設ニ依
ル民有未墾地開發事業實施セラルヽヤ諸氏選
バレテ千歳村シークヌフチニ入地早々冷害凶
作ニ遭遇シ剩ヘ地力瘠薄ニシテ經營ニ困憊ヲ
極ム時ニ砂原元藏氏北海道廳ヨリ自作農督勵
員ヲ委嘱サルヽヤ償還組合ヲ設立シ獻身農民
道ノ昂揚ニ努ム諸氏能ク和衷協同萬難ヲ克服
シ以テ其ノ業績ニ一段ノ充實ヲ顯シ北海道廳
長官ヨリ組合表彰ヲ受クルコト五度ニ及ビ益
々農本ヲ固メツヽアリ是上 皇恩ニ浴シ下官
蔭ト俟チ諸氏ノ拮据經營ニ依ル茲ニ建碑ヲ欲
シ文ヲ囑サル仍ツテ其ノ功績ヲ述ブルコト斯
クノ如シ 昭和十六年八月二十六日

北海道廳拓殖部長 小林誠一撰

(碑石背面 タテ)

入地者氏名並ニ出身縣
福井 岩崎吉榮 福島 愛澤清次郎
福島 愛澤清太郎 富山 吉田政一
鳥取 大森直近 同 吉田武雄
同 砂原豊一 愛知 櫻井勝又
山形 黒沼好藏 同 吉田武雄
新潟 金山 繁 岩手 淵端榮作
鳥取 砂原源一 石川 中島三之丞
鳥取 砂原吾一 山口 山本末太郎
新潟 田卷繁藏 廣島 平沖福松



D 02 福岡佐六翁碑

(碑石正面)

(題字 右からヨコ書き)

草創之祖

福岡佐六翁

(碑石背面 タテ)

昭和四十四年十一月再建

千歳市東丘連合會



(台座正面 タテ)

発起人

戸田敬次郎

世話人

砂原元藏

磯松光作

岩田吾作

齊藤初太郎

福岡二郎

寄附者氏名

太田多次郎

小崎源藏

古※豊次郎

磯松清八

戸田健次郎

新※多市郎

稲垣只男

福岡百松

山林作太郎

山本末太郎

※カタカナ

「ユ」の下に「ロ」

(台座左側面 タテ)

正重三六

小野塚貢

須貝寅藏

澤田吉太郎

井上甚作

黒沼政次

秋葉廣明

(台座右側面 タテ)

熊本宇次郎

工藤幸次郎

田卷繁藏

佐々木甚吉

中嶋周次郎

長嶋繁男

藤野正義

田澤留吉

本村與次郎

玉手彦六

中安平村

上岡興平

平沖福松

山本由太郎

澤田浅吉

黒沼三太郎

小野塚一夫

松〇〇〇〇

D 03 長都開拓記念碑

(碑石正面 ヨコ)

長都開拓記念碑
黒澤西蔵謹書



(碑石背面 タテ)

この地長都は 勇舞川の両岸に所在する面積一八〇〇ヘクタールに及ぶ地域であつて 勇舞の語源は アイヌ語のイヨ・マイに發し 昔時は天然林に覆われた狩猟と魚漁の場であり 明治政府の統治下にはいつても未開のまま八十年近く放置されていた

この地の開拓は 第二次世界大戦の末期昭和二十一年に 食糧増産緊急開拓者として静岡秋田両県から戦災者が 更に終戦の翌年には長野県から満州開拓経験者多数が入植したのに始まる



(台座背面 タテ書き 三段)

入植者氏名
次ページのとおり

ときまさに 戦後の物資欠乏は極限に達し 入地した農家一八〇戸は言語に絶する困苦に耐えながら 火山灰地を反転客土という わが国初めての方法で土地改良を進め 全地の耕地化と生産に大きな足跡を残した

この間 自衛隊演習場として農地の一部を また 昭和三十九年新産業都市の指定を受けてからは 市営工業団地及び住宅地の造成に協力し 市勢の發展に大きく貢献した

こゝに開拓二十五年 その労苦をしのぶとともに残された多くの功績を讃え 長く後世に 傳えるため開拓碑を建立する

昭和四十六年十二月十一日
千歳市長 米田忠雄

(一段目)

市川辰男	川口兼吉	小山千潮
伊吹靖一	木内 利	清水袈裟雄
井口音藏	小林 基	清水 武
遠藤久義	小林照平	春原健吉
唐木田福善	小松信太郎	中原清治
金井助久	小池藤吉	茅野貞藏
唐木田今次郎	後藤昭英	宮川重信
唐木田龍雄	佐々木作左工門	村田邦夫
小林麻治	佐藤憲一郎	飯島誠一
小林尚義	高橋才太郎	内川 偪
腰原安友	高橋力也	宇田義夫
佐藤保男	西牧東十	唐木田隼人
酒井 賢	橋爪富士衛	唐木田茂
清水貞治	樋口源六	北村嘉作
中嶋千勝	峯村 港	遠藤忠四郎
原 美文	宮尾 力	
藤森 保	峯村昭二	
宮沢成美	山本勝茂	
宮下繁春	吉田宗之助	
矢島安之助	金井彦右工門	
吉沢幸雄	金井庄藏	
池田修三	久保田武雅	
遠藤順吉	窪田徹夫	
岡崎重吉	小木曾直治	

(二段目)

後藤きみじ	阿部次男	三溝繁雄
佐竹吉三郎	池谷多一	佐々木末吉
酒井勝美	伊野與四次郎	高橋辰市
坂口知人	岡部信司	高橋巳之吉
下田連次郎	太田松太郎	坪井 勉
下田勘三郎	日下富衛	中島次郎
東方公雄	葛巻壽太郎	中村七郎
高遠かの	酒井豊秋	長沢正五郎
竹村康俊	関 武夫	中島太助
西沢静子	村上ミサオ	新岡仁之平
松本安次	中山希年	西沢啓作
峯村唯雄	望月 京	長谷川伍郎
宮田和則	細沢 茂	平井才次郎
市川藤作	山家武雄	池田清次郎
石垣孝平	吉田二郎	三溝邦雄
出雲定次	朝比奈勇	
木滑勇夫	浅野朔夫	
木滑七郎	有賀正男	
藏谷正男	青野太郎	
小林三男	稲田生造	
岡部龜太郎	大江 潔	
原田喜三太	倉橋 尚	
藤坂恒次	久保田登	
灘波力太郎	駒沢春一	

(三段目)

今井賢三	浅井新三	高橋正三
石垣礼一	和泉幸吉	高橋富雄
小林宗作	押切 盛	寺岡平八
田中武一	久保野孝次	天井清三
高橋欣平	木基信孝	平岡辰市
高橋光男	原田米作	藤本武夫
都築茂春	原田政惟	藤本 誠
戸田 肇	福田 實	松山春雄
西本 勝	本郷十郎	宮崎武次
重信平五郎	松岡伊三郎	湯本宣三
望月悦郎	米沢勝義	藏谷正一
森武次郎	米沢清世	戸田泰介
福井 保	荒井清一	南初太郎
米沢富之助	泉野正吉	佐々木徳雄
石山 廣	伊藤悦朗	外関係者
木谷義夫	飯田與四雄	
小林稻吉	岩本 昇	
佐竹又三郎	岩本七郎	
田中儀平	板谷富藏	
蜂谷儀雄	上田徳治	
前田正栄	小笠原幸一	
水上嘉名美	勝野善助	
向田爲一	後藤 実	
山本栄松	坂田 覚	

D 04 すみよし2号公園碑
(碑石正面 ヨコ)

すみよし2号公園
明治17年我等先人者がこの地に開拓の鋤を入れて流汗90年
本市の発展に伴い地区関係者の協力のもとに土地区画整理事業
により健全な宅地造成が完成されたことを誌し記念する
昭和48年4月吉日
千歳市東郊土地区画整理組合



(碑石背面 タテ)
経 章

昭和四十三年四月二十七日 組合設立
昭和四十八年四月二十七日 工事竣工

内容	
一、総面積	一・〇七八・五九八 m ²
一、総事業費	二六四・一三八・〇〇〇 円
一、公園面積	三三・〇〇六 m ²
一、道路面積	二五一・二五五 m ²

事業執行の機構

理事長	廣重貞雄	総代	荒川太吉	総代	武者誠治
副理事長	荒川作次		泉山留蔵		村田幸雄
常務理事	蔵谷元治		金谷シズ		山崎清吉
理事	小笠原重美		菊川 明		故山城徳次郎
	木滑一弥		蔵谷 隆		横間春義
	白木峯一		近藤貞一		
	高島松市		坂口忠三		
監 事	竹内兼次		故白木吾市		組合員
	奥山 勉		竹内由太郎		二二〇名
事務長	岩見憲弘		故滝川亮次		
経 理	千葉敏子		故中川英男		
評価委員	前田利次		廣重孝徳		
	故熊谷 正		廣重栄三		
	今与自郎		廣重鉄之助		
	三津谷時男		美の谷春夫		

D 05 理想郷碑
(碑石正面 ヨコ)

理想郷
千歳市長東峰元次書



(碑石背面 タテ)

ここ末広地区には明治十七年本道開拓の希望を抱いて山口県
よりの移民がはじめて入植した。きびしい自然との闘いの末稲作への
執着やみがたく明治二十七年に至り広重彦十郎外七名による千
歳川上流よりの用水路を設けての造田に成功した。
当時の北海道の稲作は技術水準も低くまた打続冷害凶作のた
め言語に絶する困難な経営の明け暮れであった。
しかし第二次世界大戦及び戦後食糧不足の期間を通し増産に果し
たこの地末広の役割は極めて顕著なものがあつた。
戦後多くの試練を乗り越えて我が国は経済大国へと発展を遂げた。
このため千歳市の人口は急増しかつての飛行場は今や国際空港と
しての条件整備を進めている。

このような時代の変遷は市の近郊に位するこの末広地区の農業
に対して強く都市化への転換を要請するに至りこのため関係地権
者相計り利害を越えて自らの手による街づくりを取組むこととなつた。
昭和五十三年七月二十五日本組合の設立が認可されるところとなり以来二年
有余の間事業は順調に推進され本日ここに事業の完成をみるに
至り町名も稲穂と改め新しい街が誕生することになった。
ここに千歳市並びに千歳市農業協同組合のご指導及び道
農都市開発協会の事業の各分野に亘る献身的ご協力に対し
深甚なる敬意を表するとともに新しくこの街に移り住む人
々が長く幸せな日々を送られるよう心から念願して
やまない。

昭和五十六年四月吉日
千歳市末広第二土地区画整理組合

(台座正面 タテ)

千歳市末広第三

土地区画整理組合

理事長 稲川義夫
 副理事長 広重鶴男
 副理事長 木滑一弥
 理事 稲川儀策
 理事 清水修
 監事 稲川実
 監事 木滑康雄
 評議員 木下政二
 評議員 加藤敏和
 評議員 黒田義隆
 事務局長 彦坂忠人
 組合員 浅利雍子
 近藤哲蔵
 小林忠義
 佐々木康彦
 千歳市森林組合
 羽山 癒
 古崎幸雄
 渡辺清美
 木下知代吉

(台座背面 タテ)

千歳市末広第三

土地区画整理事業

施行区域面積 一三三五五・九九平方m
 組合員数 十六名
 施行期間 自昭和五十三年七月
 至昭和五十六年四月
 総事業費 六億四千万円
 行政指導 千歳市
 事務委託 千歳農業協同組合
 設計管理 社団法人道農都市開発協

D06 この地をば…碑

(碑石正面 タテ)

この地をば

古里として

子らは在り

二本木實



(趣意書碑正面 タテ)

この地のあゆみ

この地祝梅は 戦後緊急開拓地として解放され満州 樺太からの引揚者と道内有志合わせて一九戸が人植し昭和二十三年五月開拓実験農場として発足した その後二四戸が約二〇〇町歩の土地に共同経営の理想を追求したが 火山灰に覆われた瘦地のため目的の達成ならず農場を解散した つづいて個人経営に移り試行錯誤を重ねたすえ 西瓜大栽培方式を確立し 全道屈指の西瓜名産地となり 室蘭札幌その他の市場に出荷して祝梅西瓜の名声を博した しかし 自衛隊の駐屯地 民間航空の開設 市制施行など時代の変遷と 千歳市の発展が相まって 近郊の市街化が進み この地も昭和三十九年頃から宅地化が始まった これらの宅地造成事業を計画的に進めるため開拓農家九戸と既存農家四戸により昭和四十六年五月祝梅開発期成会を結成し 良好な環境を備えた町づくりをめざして 市街化区域への編入と土地区画整理事業の施行を関係官庁に働きかけた結果 昭和四十九年十一月北海道知事の認可を得て千歳市施行による土地区画整理事業に着手した

以来 地区住民の理解と協力をいただき 八年の歳月を経てここに事業の完成をみるに至り 昭和五十六年十月から町名も新しく梅ヶ丘 弥生 寿の三町が誕生した 私たちは この喜びも事業に携わった関係各位の尽力の賜物と深く感謝し この町に住む人々の幸せと この地の永遠のあゆみを祈念しここに碑を建てる

昭和五十六年十一月吉日

千歳市祝梅開発期成会

(趣意書碑背面、タテ)
事業概要

- 一 事業名 千歳恵庭圏都市計画事業
- 一 千歳市祝梅地区土地区画整理事業
- 一 施行者名 千歳市長 東峰元次
- 一 施行面積 七六一・〇七一平方メートル
- 一 総事業費 約十九億六千万円

千歳市祝梅開発期成会

- 初代会長 武藤龍三
- 第二代会長 宮本修二
- 幹事長 大崎灌夫
- 幹事 矢島 渡
- ” 故森山運四郎
- ” 伊藤辰太郎
- ” 木村豊次
- ” 武部清一郎
- ” 山本芳久
- ” 力示義男
- ” 片岡和一
- ” 野呂忠次郎
- ” 故辻村 朔

D07 仲よしの松碑

(碑石正面 タテ 蛇紋岩に御影石板埋込み)

仲よしの松

記念樹一位

この樹は昭和五十六年十月 市民の
願いであつた国鉄千歳線の高架、電
化、駅前広場の完成を記念して千
歳市千代田町連合町内会と同駅前通
り振興会が国から譲り受け千歳市に
寄贈したものです。

多くの人達の協力を得て北海道管
林局管内盤尻国有林から移植しまし
た。樹令三八〇年双幹寄添い、相睦び、
まるでしあわせな夫婦、兄妹、友達
のような形から「仲よしの松」と名づけました。

樹名 一位 別名 おんこといいます。

森本吉雄書

昭和五十八年六月十二日



拾遺1 廃却された鶏魂碑

『千歳市所在の碑・塔調べ報告書(昭和六十二年三月)』に、所在地幌加 柴田邦雄宅西側、建立年月日 昭和四十六年九月、碑文等 正面「鶏魂碑」背面「建立年月日、ホクレン・養鶏団地東千歳組合」とあり、左上の写真が掲載されているが、平成二十一年の確認調査では見当たらなかった。

この碑跡地先の巻口忠司氏によれば「七人の鶏飼い仲間で作った大きな成果をあげた者もいたが、大規模経営化の波を受けて解散せざるを得ず、地権者変更による農地改良工事にもない昭和六十四年頃、関係者が集まって供養祭を行った後に廃却処分し畑地に戻した。その土地は現在片桐牧場の所「有地」とのことである。(平成二十一年八月)

また、「柴田邦雄宅近くに鶏魂碑がある。かつては、この地で養鶏が盛んだつたことがわかる」という一文が『東千歳の歴史』にみえる。(平成二十一年十一月発行 編集執筆 大橋四郎)



写真上：昭和61年晩秋の鶏魂碑

写真下：鶏魂碑跡地

平成21年8月撮影

(碑石背面 タテ)

寄贈者

- 千歳線高架等完成祝賀実行委員会
- 千歳市千代田町連合町内会長 亀谷樹宣他二〇三名
- 千歳市千代田町駅前通り振興会長 森本吉雄他七九名

※千歳市立図書館横の「ふれ愛の一位(イチイ)」標示板裏面の
解説文を左に転記する

標示板今昔の証

この標示板材は、昭和56年(1981年)
JR千歳線高架完成及び電化を記念
し、千歳駅前通り振興会と千代田町
連合町内会から寄贈植樹された
樹齢380年の一位であった。
当時、「仲よしの松」と命名され
千歳駅前のシンボルでもあった。



D 0 8 豊栄郷碑

(碑石正面 ヨコ)

豊 栄 郷
千歳市長 東峰元次書

この地根志越は本市開拓の黎明期である明治17年に、先達鬱蒼たる原野に開墾の鋤を入れ厳しい寒地農業の辛苦の汗を流した。明治27年ママチ川を水源に求め開田を奨励し黄金波打つ豊かな里になってここに一世紀を迎える。千歳市の発展と時代の変遷に伴い、昭和46年に市街化区域の予定地区として位置づけられこの地区の人々の強い要望と努力によって昭和53年6月に市街化区域に編入以来6年4カ月の歳月をもって土地区画整理事業と住居表示を実施し、新たにこの地を豊里と命名し昭和59年10月に完成したものである。
昭和59年10月吉日



(碑石背面 タテ)

事業概要

- 一 事業名 千歳恵庭圏都市計画事業
根志越地区区画整理事業
- 一 施行者名 千歳市長 東峰元次
- 一 施行面積 二五三・〇二九平方メートル
- 一 事業費 約十六億五千万円

- 千歳市根志越南部開発期成会
- 会長 木村豊次
 - 副会長 増子喜代太
 - 幹事長 野呂忠次郎
 - 幹事 広重貞雄
 - ” 吉田徳弥
 - ” 張山沢健太郎
 - ” 故木村春男
 - ” 土居辰夫
 - ” 武者誠治
 - ” 木村シヨ

D 0 9 駒里開基百年碑

(碑石正面 ヨコ)

駒里開基百年
駒里小中学校
北海道教育実践表彰授賞
記念
昭和61年11月23日
寄贈 松本吉氏



拾遺2 撤去された石狩空知郡界標柱

所在地 東丘 JR室蘭線脇

『千歳市所在の碑・塔調べ報告書』(昭和六十二年三月)に、「所在地 東丘、碑文等 判読不能」とのみ記載。

平成二十一年十月七日の調査では、写真上のような二二角・地上部二二六角長の木製四角柱(樹種不明)であることを確認。文字等は確認できなかつたが、表裏二面に「地籍調査」と刻字された標石が根元に埋設されていた。

この標柱は平成二十二年八月、JR追分工務所により撤去された。したがって、この標柱は『石に刻まれた千歳の歴史』には掲載しなかつた。写真下は平成二十二年十月七日撮影。

『千歳市史』に「(明治)二十四年馬追原野区画。廿六年千歳原野モ区画セリ、区画以前ハ夕張川ヲ郡界トセルニ区画ニ当リ今ノ如ク郡界ヲ改メタリ(河野常吉『胆振国』引用)」「これによると現在の由仁辺りまでが千歳郡の管轄であつた。二十四年の殖民地地区画測量まで、現在の夕張郡の一部が千歳村に含まれていたらしい」とあり、この付近も郡界変更にもなう影響を受けたのではないかと推察される。



D 10 禹甸莊碑

(碑石正面 ヨコ)

禹 甸 莊



(碑石背面 タテ)



地域泉郷ノ呼ビ名ハ昭和二十六年ニ変更サレタ
 モノテアリ ソレ以前ハケヌフチト言イ先住民族ノ
 ハンノ木ノアルトコロトノ意カラ出タモノテアル
 明治二十年頃国家行政ノ変革ニ伴フ北海道
 開拓移民奨励ニ乗ツテ散発的ニ入殖カ見ラレ始
 メタ 同シ頃北海道テハ区画測量開拓道路整
 備カ急速ニ進メラレ特ニ明治二十五年開拓鉄道
 室蘭線ノ開通ニ依ツテ当地方面ヘノ入植移住者
 ノ増加ハ急ニナツタ 定住者ノ大半ハケヌフチ川周
 辺テアリ稲作ヘノ挑戦テアツタ蛇行スルケヌフチ川ハ連年
 ノ如ク洪水氾濫ヲ起シ時ニハ人畜ノ生命スラ奪イ
 農作物ヘノ被害ハ甚大ナモノテアリ開拓者ノ最大ノ
 願イハ水害カラノ脱却テアツタ
 明治三十三年部落民総出役ニヨツテケヌフチ川下流
 部約五百間ノ切替工改修工事ヲ完成サセタノテアル
 以後ハ自力ニ依ル地先ノ小築堤補強等ヲ行イ暗
 渠排水客土区画拡大ナトモ行ナハレタ
 昭和三十五年以降ノ機械化時代ヲ迎エルニ至リ満足
 スヘキ情態デハナクナツタ
 昭和五十年ケヌフチ川流域オヨヒ下流一帯ノ低湿地
 約二百二十ヘクタールノ凡用耕地化事業ヲ起シソノ完
 成ヲ願ツテ地権者全員ヲ以テ期成会ヲ発足サセタノテアル
 事業ハ昭和五十年ヨリ着手昭和六十三年用排水
 分離完全ナル凡用耕地化力完成サレタノテアル

(前ページから続く)

事業費ノ内訳左ノ通り

全体事業費 拾六億七千萬円
 国道補助金 拾貳億一千萬円
 千歳市負担分 壹億四千萬円
 地元負担分 参億二千萬円

期成会役員

会長	清水 修	幹事	岩本久生
副会長	信田豊治		登坂英治
	遠藤道雄		土居清春
會計	小川弘光		山岸市男
	清水清二		以上

(碑石左側面 タテ)

昭和六拾参年壹月吉日之建
 題字 期成会長 清水修 謹書

陪石(禹甸莊碑の左後方 背面 タテ)

工事参加者

清水 修	開発三郎
信田豊治	鈴木 薫
遠藤道雄	信田定子
小川弘光	富田信幸
岩本正生	小栗 力
大笹晴二	信田孝夫
土居清松	松原 哲
信田 茂	藤沢 勲
山岸市男	信田登喜男
土居清春	清水常男
岩本久生	白井文子
廣世朝男	福田 清
開発幸治	村中寅夫
清水清二	岡田行弘
堂高政行	廣坂清一
登坂英治	福田数雄
登坂善一郎	森井栄治
宮崎邦彦	高山利雄
富田利則	岡本真一郎
奥村 進	

吾々ハ此ノ美田ノ中デ年々豊穰ノ秋ヲ
 迎エ至上ノ幸福ト限リナキ發展ヲ此ノ莊
 園ニ求メ達成サセナケレバナラナイ

D 11 開拓百年記念碑

(碑石正面 タテ)

開拓百年記念

(碑石背面 タテ)

平成四年九月二十一日

信田 豊治 謹書



(趣意書碑正面 タテ)

記念碑建立の記

泉郷は明治二十年以降に開拓が始まり昼なを暗く大木と丈余の熊笹葎の生い茂る大地に斧を振り鋤を打ち冷水害に悩まされながら星降る堀立小屋に暖をとり開拓に励んでまいりました

*「堀」ママ

明治二十四年 初めて稲作に成功し

明治二十六年入植者が七戸に増え

明治二十七年国有林の払下げにより

人植者が急増し多くの先人達の

幾多の艱難辛苦の積み重ねにより

つて今日の礎が出来たのであります

その偉業とご遺徳を偲び百年の

歴史に触れ将来に引継ぐことが私達

に課せられた使命に思いをいたし永遠

の発展隆昌を祈念し開拓百年を

記念して多くの方々の希いを込め

ここに建立するものであります

平成四年九月二十一日

泉郷開拓百年記念事業実行委員会



(趣意書碑背面 タテ 二段)

泉郷開拓一〇〇年記念事業協賛者名

(一段目)

泉郷連合会

小川 弘光

清水 修

開発 幸治

藤沢 勲

西野 義照

信田 茂

松原 哲

登坂 英治

岩本 久生

登坂 善一郎

岩本 正生

信田 豊治

遠藤 道雄

小栗 力

土居 清春

開発 三郎

森井 栄治

広世 朝男

信田 宇一

(二段目)

岡田 行弘

信田 孝夫

吉川 誠一

清水 清二

村中 寅夫

大笹 春三

富田 利則

堂高 政行

信田 登喜男

宮崎 邦彦

遠藤 忠雄

玉井 寛

広坂 清一

清水 常男

土居 清松

福田(数)雄

高山 守

富田 信幸

白井 文子

中川 榮

奥村 進

浜辺 修平

山岸 市男

松原 茂美

和田 靖則

米倉 聖

清水 ミサ

福田 芳

早川 清

九谷 小一郎

荒洋 一郎

木下 裕文

安田 隆伸

田口 幹子

齊藤 縁

大迫美千代

和野 勇

生田象次郎

高橋 清

西野 幹夫

高山伊佐雄

(三段目)

山野辺すま子

安沢タマエ

米沢 清世

北海道

クボタ農機

梅沢 健三

開発 治

金子 孝幸

清水 道也

大笹 千早

坂田 貞雄

鈴木 芳雄

鈴木 徳雄

酒井 茂夫

高島 慧

野元 和光

開発 一美

鈴木 雪枝

信田 隆司

小川 賢一

高山伊佐雄

(四段目)

吉川 賢也

吉川 勇

鈴木 寿守

今みどり

小川 忠松

信田 文雄

木滑 康雄

吉川 精吾

高田 絹代

吉田喜恵子

高島 毅

高島 茂男

高島 敏明

吉川 励

山城 由夫

伊藤 豊

藤原 政吉

坂本 石松

吉川 千曲

糸川 光夫

高松 勝好

寺山 才一

齊藤ふさよ

吉成 英文

桂 クキ

高島満寿雄

木下 幸一

三間 浩

楠田 朋子

野月 賢一

齊藤 豊

鷺見 孝子

清水 道子

西藤 克巳

開発 文雄

開発 重郎

登坂 修之

登坂 一 認

池谷 光正

高島幾久治

D 12 風雪に耐え碑

(碑石正面 タテ)
風雪に耐え



(趣意書碑正面 タテ)

第四工業団地土地区画整理事業完成記念

記念碑々文

千歳開拓の曙は、明治三年、高知藩八〇余名の入植者が鬱蒼とした原生林に鋤を下したのが始まりであります。

爾来、北海道の開拓は、開拓使の設置により積極的に進められて来ました。

戦後（昭和二〇年以降）、食糧増産政策のもとに、満蒙開拓団からの引揚者をはじめ、海外からの帰還者を中心として本州各地からの移住者により、開拓が始まりました。

特に、本事業地区周辺は長野県からの入植者により開墾が進められてきました。

千歳周辺一帯は、恵庭岳、樽前山の噴火による火山灰地の痩せ地でありましたが、開拓者の血のにじむ努力と不屈の精神が荒地を畑地へと転換して行ったのであります。昭和二十七年から北千歳駐屯地の開設に伴う開拓地の買収が始まり、昭和三十一年には北海道大演習場用地として、南三三号以南の開拓地が大々的に買収されたのであります。

その間、昭和二八年には千歳少年院が開設される等、国道三六号線沿いという好立地条件からそれぞれ時代の要請に依りて来ました。

昭和四六年には当市の最初の線引きに際し工業専用地域として市街化区域に編入されたのであります。営農の意欲冷め止らず、近年まで畑地として耕作されて来たところでありましたが、平成三年に市の強い要請と地権者の開発合意を見て、市施行による工業団地造成に踏み切ったのであります。

ここに、事業の完成を記念し、その歴史を後世に残そうとするものです。

平成六年七月建立

(趣意書碑背面、タテ)

事業概要

一 事業名 千歳恵庭圏都市計画事業
千歳市第四工業団地土地区画整理事業

一 施行者 千歳市

一 施行面積 三万四千七百二十四㎡

一 施行期間 平成三年度～平成六年度

一 総事業費 約一億六千万円

一 審議会 会長 原 英文

委員 腰原 安友

酒井トミ子

西澤 久

吉田 教市

(株)地崎工業

地崎商事(株)

石川 一郎

水田 正三

田中 修司

右近栄二郎

加藤 敏秋

中田 守

伊藤 晋介

鈴木 秀雄



D 13 黎明郷碑

稲穂二丁目

(碑石正面 タテ)

稲穂やすらぎ公園

黎明郷

千歳市長梅沢健三書

(趣意書碑正面 タテ)

碑文

千歳市の北東部旧末広町一帯は戦前低地帯を水田 戦後高台を酪農として食糧増産に貢献すると同時に昭和三十四年千歳市森林組合が地区を縦断する防風保安林を解除して育苗畑並びに苗木の生産を図り農林業の一翼を担ってきた地域である

昭和四十年代に入り千歳市の飛躍的な発展と市街地進展に伴ない経営の転換を余儀なくされ 昭和五十九年十月に市街化区域編入と同時に稲穂土地区画整理組合の認可を受け住宅地開発に踏み切った

恵まれた自然と立地を調和させた街づくり形成のために尽力下さいました千歳市、千歳市農業協同組合、道農都市開発協会の献身的なご協力に深甚なる敬意を表すると共に輝かしい「黎明郷」と銘し新しくこの街に移り住む人々の幸せを願って記念碑を建立する



碑石:鉄石英岩 H:250 W:200 D:85
台座:御影石張り H:67 W:412 D:252
碑文碑:御影石 H:66 W:114 D:16
(cm)

(趣意書碑背面、タテ)

千歳市稲穂土地区画整理事業
施工面積 一三〇・三九〇・八三平方メートル
総事業費 八〇四・一八五・〇〇〇円
施工期間 自昭和五十九年十月
至昭和六十二年十月
行政指導 千歳市
事務委託 千歳市農業協同組合
事業設計委託 社団法人道農都市開発協会
昭和六十二年十月吉日

(碑石左側 関係者名簿碑「千歳市稲穂土地区画整理組合」)

初代理事長	若山長大	組合員	石田勝夫
理事長	今 要吉		岩本久生
副理事長	長谷川清二		遠藤義博
副理事長	細沢 茂		遠藤 満
常勤理事	堤 保		大蔵長蔵
理事	遠藤道雄		杉本茂也
理事	川端政次郎		千歳市森林組合
理事	近藤一夫		長谷川幸子
監事	北村五郎		藤田勝久
監事	佐々木徳記		吉川元光
監事	遠藤忠彦		堤サダ子
評議員	石田繁子		青山俊夫
評議員	木滑康雄		堤 道子
事務局長	佐々木昭		兼平ツネ子
事務局員	亀井俊明		佐々木敬子

E 01 馬頭観音像

泉郷 馬頭観音堂内

碑文等 なし



E 02 馬頭観音像 (泉郷 馬頭観音堂横)

(台石背面、右からヨヨ書き)

昭和三年十月二十日之建

※白井庄蔵建立



E 03 家畜報恩碑（長都酪農会館前）

（碑石正面 題字は右からヨコ書き、碑文 タテ）

家畜報恩碑

正三位勲一等男爵佐藤昌介閣下題字
 千歳村長都ノ地ハ明治卅季ノ開拓也土質甚タ不良農法亦陋習ノ域ヲ
 脱セス爲ニ耕地荒廃シ窮乏日ニ迫リ離村者相尋キ前途暗憚タリ是ニ於イテ
 有志相議リ大正十二年札幌近郊ヨリ牝牛廿餘頭ヲ移入シ農業組織ノ
 改善ヲ企圖ス之本村酪農業ノ端緒也爾來牛馬豚雞等逐年増殖シ
 農法大イニ革リ地力増進シ生産従ツテ興リ往年ノ荒村ハ変シテ豊穰ノ
 樂土ト化ス之全ク家畜ノ恩恵也乃チ茲ニ碑ヲ建テ感謝報恩ノ意ヲ表シ
 其靈ヲ慰メント欲シ來リテ撰文ヲ余ニ囑ス純情允ニ麗シク正ニ斯レ農道ノ精華ナリ
 惟フニ家畜ハ寒地農業ノ根幹ニシテ而モ之ヲ愛スルハ人道ノ本義ナリ此心ヲ
 發揚スレハ長都ノ郷ハ永久ニ榮工世道人心ノ啓發ニ裨益スル處亦大ナルヘキヲ信ス
 蓋シ近來ノ美舉ト謂フ可シ

昭和十二年七月

北海道酪農販賣組合聯合会長 黒澤西蔵 撰

大安寺主董 押見龍江 書

（碑石背面、タテ）

千歳村長都
 有志一同建之

發起人

戸田菊次
 田澤石藏
 中村 茂
 藤本岩一
 神出 寛
 神出 智
 鈴木恭次郎

賛同者 藤本光二



E 04 馬頭観音像

幌加

（台石背面、タテ）

昭和十三年

四月十七日

再建立

發起人

菊地三太



E 05 馬頭観音碑

泉郷 馬頭観音堂横

（碑石正面 タテ）

馬頭観音

（台石正面、右からヨコ書き）

吉

川

（台石左側面、タテ）

春風号

行年十四才

（台石背面、タテ）

昭和十五年

吉川建之



E 06 獣魂碑

*千歳市美々から北海道畜産公社早来事業所へ移設

(碑石正面 タテ)

獣魂碑

(碑石背面中央 タテ)

昭和廿二年五月十六日建之 千歳町

千歳食肉協会

(碑石背面右側に銘板はめ込み タテ)

平成四年七月

千歳市ヨリ移転



E 07 馬頭観音像 (中央)

(台座正面 ヨコ)

(台座右側面 ヨコ)

馬頭観世音

昭和四十年五月十五日 建之
発願主 中央養豚組合

(趣意書板 タテ)

(木枠、トタン張り、黒ペンキ書き)

馬頭観世音菩薩

私達が平素御供養している御先祖乃

至縁者等以外の例えば早産・流産等又は

家畜その他一切の生物無縁の精霊に佛縁

を得せしめんが為の仮の御姿です、私達は

尊前にひざまづき心から無縁の精霊の

御供養を致しますよう。

発願主

※「無縁の精霊」ニカ所、赤ペンキ書き



E 08 獣魂碑 (幌加)

(碑石正面 タテ)

獣魂碑

(碑石背面 タテ)

昭和四十六年十二月四日

東千才農協養豚研究会

(碑石左側面 タテ)

新田一男

滝 儀一

井上誠一

柴田武臣

明石砂雄

宮本 勝

塚辺清一



E 09 鶏魂碑 (道央養鶏1)

(碑石正面 ヨコ)

(碑石背面 タテ)

鶏魂碑

道央養鶏

堀 勝

沼山佐太郎

武石忠興

武石忠俊

高澤スエノ

菅原 正

昭和四十七年五月吉日建之



E 10 鶏魂碑 (道央養鶏2)

(碑石正面 タテ)

鶏魂碑

(碑石背面 タテ)

昭和四十七年七月五日建之

E 11 犬魂碑

※美々から市営牧場脇に移設
(碑石正面 タテ)

昭和五十年十月二十七日建之
犬魂碑
千歳市野犬防害委員会



E 12 家畜報恩碑 (駒里)

(碑石正面 ヨコ) (碑石背面 ヨコ)

家畜報恩碑

駒里開基九十周年記念
建立 昭和五十一年十月十七日
題字 千歳市長 東峰元次

※碑の左横に「開基九十周年開校七十周年記念事業寄付者御芳名」板碑



E 13 報恩碑 (都 寺岡牧場)

(碑石正面、タテ)

報恩碑
牛と土に感謝する

※雅号(不詳)・落款

(碑石背面、タテ)

此の碑の建立にあたって
酪農専門農協サツラク農業協同組合創立の功労者石黒正一先生より
碑文を賜わりサツラク農業協同組合元参事山田宏氏 千歳市役所
武田新一氏の御高配を戴き高松石材店石匠高松八郎師に制作をお願いし
ここに完成を見るに至った

此の碑の建立にご助力下さった先生先輩諸氏
に深謝し多くの牛等と恵み大地に感謝したい

昭和五十三年十一月十二日 施主 寺岡勝一

合掌

京子
チヨ
幸子 宏
公 敦



E 14 馬頭観世音菩薩碑 (東丘 若山牧場)

(碑石正面 タテ)

馬頭観世音菩薩
(台座背面 ヨコ)

昭和五十七年六月建之



E 15 猷魂之碑（幌加 明石畜産）

（碑石正面、タテ）
猷魂之碑

千歳市長東峰元次書

（碑石背面、タテ）
昭和五十八年六月 明石砂雄建之



E 16 馬頭観世音碑

美笛 千歳橋傍

（碑石正面 タテ）

馬頭観世音

（碑石右側面 タテ）

千歳鉦山製材所
村瀬一郎
市橋六蔵
前田正雄

大井辰四郎
野坂喜三郎

（碑石背面 タテ）

昭和十六年七月十七日建之



碑石:安山岩 H:130 W:55 D:35 (cm)
台座:安山岩 台座全体の高さ H:82
1 段目台石 H:27 W:77 D:70
2 段目石積み H:55 W:130 D:120

F 01 鮭鱒人工孵化發祥記念碑

（碑石正面上部）

鮭鱒人工孵化發祥記念碑

北海道水産ノ大宗タル鮭鱒漁業ノ維持増産ハ夙ニ官民ノ協力セル所ニシテ明治十年開拓使ハ豊平川及漁川ヨリ鱒卵ヲ採リ札幌市偕樂園ノ湧水ヲ利用シテ人工孵化ヲ試ミタルハ實ニ本道ニ於ケル所業ノ濫觴ナリ爾來此ノ狀況ニ鑑ミ各地ニ孵化事業ノ勃興ヲ見今ヤ年歳鮭四億二千九百萬粒鱒一億七千三百五十萬粒ヲ孵化放流スルノ隆盛ニ達シ其ノ事業ハ北海道水産孵化場ヲシテ全道五十有一箇所ノ孵化場ヲ統括セシメ毎年ノ産額鮭八萬石鱒十七萬石ノ達成確保ニ努メツツアリ蓋シ陸地ノ開發駿騁乎トシテ進展スル現代ニ於テ河川ヲ産卵場トスル自然蕃殖ハ勞多クシテ効少キハ瞭ナルヲ以テ須ク人工孵化ノ積極的効果ニ待ツヘク然モ孵化放流數ノ多寡ハ數年後漁獲ノ豊凶ヲ左右スルハ柄タル事實ナルニ徴シ愈愈此ノ信念ヲ不動タラシムルモノナリ

惟フニ開拓草創時代以來ノ經驗ニ因リ今ヤ前叙ノ成績ヲ舉クルニ至リタルハ偏ニ先人ノ卓見ト努力トノ賜ニシテ之ヲ追慕シ其ノ偉業ヲ讃ヘルト共ニ本事業ノ發祥ヲ記念シ且永ク後昆ニ傳フルモノトス

昭和十八年十二月

北海道廳長官正四位勲二等坂千秋閣下題額
北海道水産孵化場長正七位野田信俊撰並書

（碑石背面、タテ）

昭和十九年十一月三日

北海道鮭鱒保護協力組合

F 02 北海道虹鱒養殖發祥之地碑

（碑石正面 タテ）

北海道虹鱒養殖

發祥之地

（碑石背面 タテ）

昭和四十一年九月十六日

北海道虹鱒協會建之



F 03 千歳サケの里碑

(碑石正面 タテ)

千歳

サケの里

(左側 趣意碑 正面 タテ)

千歳川は 支笏湖を源とし 太古の昔よりサケが遡上する母川として 人々の暮らしを支え 風土 歴史を育みながら 自然の営みの中でとうとうと流れてきた命の川です

明治二十一年に千歳川のサケ マスふ化事業が始まって間もなく 北米から取り入れたインディアン水車によるサケの捕獲事業が この地で開始されて以来今日までその伝統的手法が受け継がれ 千歳川の秋の風物詩として広く親しまれています

千歳川に遡上するサケを愛しみ 自然の恵みに感謝をする祭が 市民の手によって昭和五十二年から始められ「インディアン水車まつり」へと「千歳さけまつり音頭」の祭囃子が響き渡る中で 新しい歴史が創出されてきました

平成六年九月 千歳市サーモンパークの完成を記念し また 千歳川に恵みを与えてくれたサケを いつまでも大切に育てていくことを決意して サケの里の碑を建立します

平成六年九月吉日

インディアン水車まつり

記念碑建立実行委員会

池田吉和 入口徳美 神出晴夫 高田伊佐男

高松石材店 藤本敏広 正木一郎 松浦堅治

(右側 趣意碑 背面 タテ)

千歳さけまつり音頭

作詞 吉内道子

作曲 横内 淳

製作 高田伊佐男

一 ハア

千歳川面の夜霧が明けりや
ギンリン波立つ水しぶき

今日も来たかよはるか千里

ここはここはふるさと千歳川

ドントコイヨサコイ鮭の群れ

二 ハア

空もうろこのあきあじ祭り

インディアン水車の流し唄

せおと波音旅まくら

ここはここはふるさと千歳川

ドントコイヨサコイ鮭の群れ

三 ハア

四季を色どる石狩平野



おらが千歳に色そえる

澄んだ〇流(せせらぎ) 人情橋

ここはここはふるさと千歳川

ドントコイヨサコイ鮭の群れ

(右側 陪碑 正面 タテ)

はじめての帰郷

石狩川の漁況は走り 中央好景気を伝え来る

も 千歳川に於て一尾の跳ねあるを見ず

親魚捕獲の用意万端整えるにも拘わらず

毎日徒らに網を操りて労働するは実に安からぬ

思いにてありき……

六日夜半(明治二十五年十二月) 捕獲場に当

り 炉火遽に煌かに土人の往来頗る喧噪なり

忽ちにして網を揚ぐる声の勇ましく聞こゆるは

以て魚の浜り来れる状を知るべく かかりし数の

の夥しきと察すべし

魚の浜上は この日を以て肇とし 尾鼻相連

なりて来ること昼夜を差別せず 十日に至りふ

化場前面の河身は殆んど魚を以て充滿するに至

れり

「千歳通信」藤村信吉氏の記録より

(右側 陪碑 背面 タテ)

帰ってきた鮭

作詞 正木一郎

作曲 横内 淳

制作 高田伊佐男

一 帰って来いよと真心こめて

離してやった寒い日に

いずこの果てに行くとも知らず

ねぐら定めぬ最北の地で

どんな思いでいるのでしょうか

二 忘れることのないそのままに

四年幾日もすぎさつて

今日か明日かと待つもどかしさ

千歳川(ふるさと)こいしその一念に

幾千海里怒濤をこえて

三 来たぞ く の声聞きたびに

見れば見るほどたくましく

すぎしあの日がまぶたに浮ぶ

銀のうろこに涙がきらり

鮭さん本当にごくろうさん

G 0 1 千歳空港門標

(正面・背面 鉄製表示板 ヨコ)

千 歳 空 港
CHITOSE AIRPORT



(正面右下に鉄製銘板 ヨコ)

竣工 昭和37年10月
揮毫 北海道知事 町村金五
施主 千 歳 市
監督 北海道開発局札幌開発建設部
施行 株式会社 地 崎 組

G 0 2 千歳飛行場を造った村民顕彰の碑

(碑石正面 タテ五行書き)

鉄振う
村人の 夢
ここに 舞う
※句の下に
西山史真子原図のイラスト画

(由緒碑正面、タテ)

千歳飛行場ここに始る
大正十五年、村民の労力奉仕で造られた
小さな着陸場に歓喜に迎えられて複葉機
が着陸した
昭和九年、千歳飛行場として開場し、さ
らに十一年まで村民の手による拡張工事
が行われた
子供から老人まで共に汗を流した飛行場
は、今、翼を世界に広げる
飛行場開設七十年を記念して村民の偉業
を讃え、千歳市民の誇りとして碑を建立
する

平成八年秋

千歳飛行場を造った村民顕彰の碑建立実行委員会
(碑石、由緒碑ともに揮毫榊原武雄)



G 0 3 「北海」一号機ブロンズ模型

(台座正面 真鍮製銘板 ヨコ)

大正15年10月22日、札幌を飛び発った
小樽新聞社(現、北海道新聞社)の
「北海」一号機が、この地に着陸した。時に、
午後1時20分。
われを忘れて手を振っていた人々から、
どっと歓声があつた。
村民たちが、大空に夢を抱き、手に手に、
鍬やスキを持って造られた着陸場は、
今日の空港の礎をなした。



※新千歳空港「翼の広場」から移設、実物の三分の二の大きさ



G04 「北海」一號機操縦士之像

(台座正面、タテ)

「北海」一號機操縦士之像

(台座右側面 ヨコ)

酒井憲次郎操縦士の紹介

酒井憲次郎操縦士

大正 15 年 10 月 酒井操縦士の指導と各戸から一人ずつ、それに青年団員、婦人会、学童などが、鉞(まさかり)、鋸(のこ)、鍬(くわ)などを手に 2 日間の労力奉仕による抜根整地で、長さ 200 メートル、幅 110 メートルの着陸場を造成した。

同年 10 月 22 日に、その着陸場にはじめて降り立ったのが、「北海」1 号機を操縦し飛来した 23 歳の酒井操縦士であった。

- 明治 36 年 新潟県中蒲原郡金津村(現 新津市)にて出生
 - 大正 11 年 新潟県立長岡工業学校を卒業
航空局第 3 期陸軍委託生として所沢陸軍飛行学校に入学
 - 大正 14 年 一等飛行機操縦士の免許取得
陸軍航空本部技術部試験飛行係に勤務
 - 大正 15 年 小樽新聞社に入社
千歳着陸場に初着陸
 - 昭和 2 年 朝日新聞社に入社
 - 昭和 7 年 日満議定書調印の歴史的な光景を収めたニュースフィルムを空輸の途中、暴風雨のため日本海で遭難・殉職
- (酒井憲次郎享年 29 歳)

遭難機の破片が鳥取県東伯町の海岸に打ち上げられ、同機に搭乗の「酒井片桐飛行殉難碑」が、日本海を見下ろす八橋の城山に建立されている。



(台座左側面 タテ書き 五段) 建設協力者

- | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 大矢秀計 | 工藤幾子 | 近藤久雄 | 鈴木修 | 千葉大夢 | 中村敬次郎 |
| 大平利吉 | 工藤義雄 | 近藤摩人 | 杉森一身 | 千葉かおる | 中村小雪 |
| 大橋桂子 | 荃津春松 | 近藤リキ | 杉原婦紀 | 千葉英二 | 中村要 |
| 大野喬 | 木村和夫 | 近藤勝人 | 杉原司郎 | 千葉はな子 | 中村玲太 |
| 大沼千枝子 | 故北岡体一 | (三) 段目 | 菅原文彌 | 田中満寿子 | 中村裕子 |
| 大沼美智子 | 川端正裕 | | 尚和孝男 | 田中実 | 中村康典 |
| 故大沼鶴次 | 川原博明 | 故近藤義雄 | 島倉弘行 | 田中龍樹 | 中村文保 |
| 故大谷忠助 | 故川尻清美 | 故今与自郎 | 故島倉充平 | 田中修嗣 | 中田嘉美 |
| 太田正孝 | 金山善次郎 | 今 雅志 | 塩川幸男 | 竹内恵子 | 中里 豊 |
| 梅沢健三 | 金山政治 | 今 晴美 | 澤田 弘 | 瀧澤順久 | (五) 段目 |
| 岩本久生 | 加藤芳枝 | 小松 裕 | 澤田 篤 | 瀧澤榮八 | 中里 豊 |
| 故岩本千年男 | (二) 段目 | 駒澤文雄 | 佐々木みき | 故滝川亮次 | 故中川種次郎 |
| 故岩本小三郎 | | 小林義知 | 故佐々木三夫 | 高橋哲夫 | 土居敬典 |
| 伊藤繁樹 | 片山未生 | 故小西 清 | 佐々木勝 | 高野 功 | 富田勝三 |
| 故伊藤 弘 | 加藤武仁 | 小玉 晃 | 榊原武雄 | 高波 満 | 戸田泰介 |
| 今村孝雄 | 笠井 昇 | 小島英人 | 齋藤幹親 | 高慶繁博 | 故東峰元次 |
| 泉谷猛宏 | 開発 治 | 国分きよ | 齋藤資親 | 平 利夫 | 天童秀男 |
| 石田純治 | 開発幸治 | 毛内百合子 | 後藤和枝 | (四) 段目 | 津坂理絵 |
| 安澤健次 | 小山田直美 | 黒田尚樹 | 後藤京子 | 園田七五三 | 津坂栄子 |
| 故安達大蔵 | 尾山 逸 | 栗原敏行 | 後藤秀一 | 故関久五郎 | 津坂政雪 |
| 明野幸久 | 落合幸四郎 | 熊木安彦 | 近藤 巖 | 鈴木 清 | 千葉久義 |
| 小笠原幸雄 | 熊木安彦 | 栗原敏行 | 近藤 巖 | 鈴木 清 | 千葉順吾 |

(各段 30 名 計 150 名)

G 0 5 北海一号機復元模型飛行機
(説明板 ヨコ)

— 北海一号機 —

復元模型飛行機

大正 15 年、千歳飛行場に初めて着陸した三菱式

R22 型単発複葉機。海軍最初の国産艦上偵察機

「海軍一〇式艦上偵察機」の民間改造型。

同偵察機は、大正 12 年頃から昭和 10 年頃まで

長期にわたって使われ、その間北海一号機のように

民間に払い下げられ新聞社用機、観測機として

改造されたものも多い。

展示機は、原寸大の復元模型飛行機です。

〈 原型機主要諸元 〉

構造：単発 複葉機

翼：木製骨組 羽布張り フラップなし

胴体：木製骨組 羽布張り

乗員：3 名

動力：三菱ヒ式 水冷式 V 型 8 気筒 最大出力 3 2 OHP

寸法：全幅 12.039m 全長 7.925m 全高 2.895m

重量：自重 980Kg 搭載量 340Kg 燃料容量 349ℓ

性能：最大速度 110Kt (203.72Km/h)

実用上昇限度 6,000m 航続時間 3.5h

寄 贈

平成 18 年 4 月 25 日

北海道空港株式会社



(台座背面 タテ書き 4 段) 建設協力者

故山崎友吉 故山崎 武 山口貞四郎 矢島 渡 森谷吉夫 守屋満里 本宮義輝 村吉徹也 村中敬維 水村英彦 松岡信之 牧山善幸 前田和歌子 前田好通 前田利次 故前田政太郎 米田真由美 星野一郎 星井田究 星井田丈夫 星井田政名 舟生 博 吉田博介 米澤勝義 故米田忠雄 故渡部郁郎 故渡部栄蔵 故渡部 茂 渡部祐一郎 渡邊得二 新潟県 酒井秀雄 酒井忠雄 鳥取県 杉原俊夫 鉄本忠宏 東伯町 八橋振興会 千歳市役所部長会	山田範長 横田隆一 吉川隆憲 吉田博介 米澤勝義 故米田忠雄 故渡部郁郎 故渡部栄蔵 故渡部 茂 渡部祐一郎 渡邊得二 新潟県 酒井秀雄 酒井忠雄 鳥取県 杉原俊夫 鉄本忠宏 東伯町 八橋振興会 千歳市役所部長会	(一 段 目) 二ツ屋香 二ツ屋やえ子 舟生 博 吉田博介 米澤勝義 故米田忠雄 故渡部郁郎 故渡部栄蔵 故渡部 茂 渡部祐一郎 渡邊得二 新潟県 酒井秀雄 酒井忠雄 鳥取県 杉原俊夫 鉄本忠宏 東伯町 八橋振興会 千歳市役所部長会	(二 段 目) 米谷千鶴子 力示文雄 航空自衛隊千歳基地幹部会 航空自衛隊千歳基地准曹会 航空自衛隊千歳基地操縦者一同 新千歳空港テナント会 スノウショップ株式会社 全日本空輸株式会社 大丸株式会社カミノ 千歳印刷株式会社 社団法人 千歳観光連盟 千歳建設株式会社 千歳建設業協会 千歳航空協会 千歳市環境整備事業協同組合 千歳市新富北町内会 千歳商工会議所 千歳造園建設業協会 千歳土建株式会社 千歳市役所部長会	(三 段 目) J A 道央農業協同組合 株式会社 井坂商会 株式会社 小笠原商店 株式会社 金歳堂 財団法人空港環境整備協会新千歳事務所 株式会社 クリーン開発 航空自衛隊千歳基地幹部会 航空自衛隊千歳基地准曹会 航空自衛隊千歳基地操縦者一同 新千歳空港テナント会 スノウショップ株式会社 全日本空輸株式会社 大丸株式会社カミノ 千歳印刷株式会社 社団法人 千歳観光連盟 千歳建設株式会社 千歳建設業協会 千歳航空協会 千歳市環境整備事業協同組合 千歳市新富北町内会 千歳商工会議所 千歳造園建設業協会 千歳土建株式会社 千歳市役所部長会	(四 段 目) 千歳市役所課長会 千歳民報社 千歳を知る会 富樫電気工事株式会社 株式会社日本エアシステム 日本航空株式会社 ノース・スター・ツーリスト株式会社戸田 株式会社 花房 株式会社 フジプラ 防衛大学校同窓会 航空自衛隊千歳支部(碧雪会)一同 北央三菱自動車販売株式会社 株式会社 北海道エアシステム 北海道空港株式会社 ホテル日航千歳 丸駒温泉株式会社 株式会社 もりもと 株式会社 山三ふじや 緑建工業株式会社 千歳市 平成十三年十月二十二日 酒井飛行士ブロンズ像建立実行委員会
--	---	--	---	--	--

(1 段目:30 名 2 段目:11 名と 1 団体 3 段目:24 団体等 4 段目:20 団体等)

H 01 墓石 千正寺

(墓石正面 タテ)

南部蛸崎 寅三月死去
大室治左衛門
俗名 仙臺屋政吉
深浦 弘化巳年死去



(碑前の解説板 ヨコ書き)

(墓石右側面 タテ)

安政二年 ユウフツ支配人
施主
卯五月日 山田屋金兵衛

H 02 太平山碑

(碑石正面 タテ)

太平山

(屋根の棟木にアルミ製プレート
ネジ止め ヨコ)

西暦2003年5月吉日



(碑前の解説板 ヨコ書き)

史跡 太平山

大正4年、恵庭岳山麓ポロピナイに「太平山」と彫刻された石碑が発見されました。
この石碑は、秋田県雄勝郡岩崎知事佐竹義理が、燐寸の製造に必要な硫黄の採鉱を恵庭岳に求め、この仕事の安全と成功を祈願するために立てられたものであります。
「太平山」とは、秋田県を代表する山で、この山に岩崎藩主は、三吉神社を祭っていることから、その山の名前が彫刻されたといわれており、また、彫刻した者も城作り専門家の石屋といわれております。
恵庭岳頂上付近に銅製の直径1米の大釜を数基設置し、採鉱した硫黄に温度を加え粉末にして輸送しており、今でも恵庭岳噴気孔付近に整地されたと思われる跡が見られます。

千歳市

*上記日本文の右横に「英語解説文」併記

H 03 五神名塔(天照太御神碑)

(碑石 五角柱 タテ)

(正面) 天照太御神

(時計回りに) 大巳貴命

少名彦命

埴安姫命

倉稲魂命

(台座：五角形の正面 タテ)

明治廿三年
三月一日



拾遺 3 移設改修された駐蹕之地碑

所在地 本町五

この碑を『石に刻まれた千歳の歴史』の表紙に掲げた(写真上)のは、地方自治体としての千歳の原点を表徴する重要な史蹟との認識による。
由緒碑の文中にも「明治天皇聖蹟ヲ私人ノ所有ヨリ村ニ移管セシコトニツキ其ノ顛末ヲ録シ之ヲ後昆ニ傳ヘン：村會ノ議決ヲ經テ之ヲ受納シ永ク其ノ守護に任スルコトナレリ：」とあるので、半永久的にこの場所
で明治四十二年建設時そのままの姿をとどめ続けるもの、また、そう
であってほしいというのが調査者一同の思いであった。
残念ながら平成二十四年秋、写真下のようにその姿と場所を変えた。



写真下：平成25年10月24日撮影

H 04 山神碑

(碑石正面 タテ)

山神

(碑石右側面 タテ)

明治三十八年十一月十五日建之

(台石正面 タテ)

発起人

天野兵太郎

世 大川原春吉

話 藤原仁太良

人 青田甚造

白石勝太良

新築請負

小田部喜一郎

(台石右側面 タテ)

又村石五郎

小林市次郎

佐藤豊太

村上萬吉

工藤惣吉

岩本米造

藤ノ亀太郎

長谷川※次郎

白石得之助

(台石左側面 タテ)

天野慶三郎

大川原一美

浜本岩次

宮本裕太郎

矢羽場善助

朝里太助

山口新八

大橋大七

川岸米造

※「興」の略字か「口」の右に「木」、その下に「二」「八」

(ブロック囲い右に ヨコ)

昭和四十三年七月二十三日



H 05 馬頭観世音碑 (清水町)

(碑石正面 タテ)

馬頭観世音

(碑石背面 タテ)

昭和三十五年十月建設

*由来記 (合板に墨書き タテ 祭壇右側の壁に掲額)

馬頭観世音の由来

凡そ神の道、仏の道、動植物の道、人の道は社会進化向上に於いて不可欠の道で之を四方の道と謂い、之を尊敬し勤行する事によって、社会を浄化し真の光明を顕現し得るものである。

然るに世人は神、仏、人の三道は之を尊敬し勤行しているも、動植物の道だけは一般に等閑に付し、昔から動物の諸霊を「馬頭観世音」として祀ってあるにも拘わらず一般に「馬頭」とは馬の頭を祀ったもので馬の関係をもった者だけがお祭りするものであると誤解している事は実に残念である。人間以外の動植物が直接、間接、社会に貢献し、死後迄も毛、骨、肉、皮として用いられて居り、殊に馬は山野の開拓に田畑の耕作に荷物の運搬に、凍る冬期にも、炎暑の真夏にも骨身を惜しまず、献身的な労役は機械文明の魁となり、その功績は馬力と後世に名を残した意味は深いにも拘わらず、此の諸霊魂祀りに気付いていないことは、誠に遺憾である。当教団における

馬頭観世音とは宇宙創造の神八大龍王の大慈悲を顕現され、ここに馬を筆頭として普く動植物一切の霊魂の成仏出来るように神様は馬頭観世音にお力を与えたにより即ち馬頭観世音とは動植物一切の諸霊の総称の意味に付されたる名称であることを充分理解してもらいたい。万物の霊長たる私たちは以上諸動物の社会人類に貢献する事実に意を注ぎ常に「馬頭観世音」を礼拝し至誠至純以って之を慰勞し成仏せしむることが一面吾々人類の義務である事を深慮するものである。

宗教法人 八大龍王大自然愛心教団

教祖 教団長 石川セン



H 06 極樂寺開基之碑

(碑石正面 タテ)
極樂寺開基之碑

(碑石背面 タテ)

開基昭和十七年四月二十七日 極樂寺釋隆縁
坊守昭和三十四年一月二十六日 安樂院釋尼妙昭
二世昭和十八年一月六日戦死 大乘院釋隆正
昭和三十六年九月仏日建之 檀徒一同



(台座後ろモルタル塗り上面 ヨコ)
1961、9、23



H 07 供養塔

(碑石正面 タテ)
供養塔

(碑石背面 タテ)

石狩と十勝を結ぶ鉄道石勝線の開通に
よる駒里共同墓地の移葬にあたりこの地
に眠る先駆者の霊を弔うため千才市はこ
こに塔を建立する
維時 昭和四十一年十二月二日
千才市長之建也

H 08 千歳市慰霊塔

(中央シヤカ坐像の台座下)

廣供養舍利

昭和五十三年 戊午

五月八日

日達



*塔の前方広場隅に「千歳仏舎利塔」のタテ書き表示板

I 01 二宮金次郎像 (千歳小学校)

(台座正面 タテ)

報徳

(台座背面)

指 千歳村

定 經濟更生特別助成村

記 昭和十四年三月十四日

念 寄附者 渡部榮藏



I 02 二宮金次郎像 (支笏湖小学校)

(台座正面 タテ)

二宮金次郎像

(台座背面 タテ)

谷本 亀

昭和三十八年五月建立



I 03 開校七十周年記念碑 (駒里小中学校)
(碑石正面 ヨコ)

開校七十周年記念
51.10 大蔵長蔵謹書

(左右の校門柱下部に、それぞれ下記の銘板貼付)
千歳市立駒里小学校 千歳市立駒里中学校
開校年 明治39年10月7日 開校年 昭和31年12月27日
(1906年) (1956年)
開校100周年 開校50周年
平成18年11月25日 平成18年11月25日



I 04 柏葉像 (千歳中学校)
(台座正面 ヨコ) (台座左側面 ヨコ)

柏葉

開校30周年記念
1977.10.23



I 05 閉校之碑 (蘭越小学校)
(碑石正面、タテ)

閉校之碑

千歳市長 東峰元次書

(碑石背面、タテ)

開校昭和二十一年十一月二十日
閉校昭和五十三年三月三十一日
寄贈者 蘭越小学校閉校協賛会
千歳市桂木一丁目 椿輝雄



(台座正面 「校舎写真」の下に趣意書 タテ)

閉校の碑 「心のともしび」 建立のいわれ
一九四六(昭和二一)年、ランコウシの里の人々の
熱意が実り、愛する子弟の学びやが築かれた。
児童たちは、歴史に映えるみどりの丘、千歳のせせらぎに
嬉々として学んだ。
時代は移り、一九七八(昭和五三)年三月、教えの進展は
近隣学校への統合を向かえ、三十三年余にわたる星霜の幕を
閉じることとなった。
育み巣立った児童は、在校生二十二人をふくめ三百五十名、
教えの師は三十八名を数えた。
伝統とゆかりに栄えた学びやにちなみ、関係者有志の人々が
集い、ここ豊かなる実りの大地に、蘭越小学校閉校の碑を
建立し、培ったきずなを「心のともしび」と論じた。
二〇〇〇(平成十二)年十一月、故あって、この地に移し
整えられた。
蘭越小学校閉校の碑「心のともしび」考える会

(台座背面)

「校章」と「蘭越小学校校歌」の写真版

※建立年月 昭和五十三年三月(復活の記録) 目次に記載あり

I 06 足あと百年碑(千歳小学校)
(碑石正面 ヨコ)

足あと百年
未来へつづく
吉田信一書
千歳小学校開校百年記念協賛会

(碑石背面 タテ)
一 たなびく煙樽前の
姿うかべて流れくる
千歳の川の澄む水に
自然の恵たたえつつ
吾が学び舎は建てるなり
二 希望を高くかかげては
心正しく身は強く
学びの道にはげみ合い
文化の光仰ぎつつ
花と香らん吾等なり
(碑石右側面 タテ)
昭和五十三年十月十五日建之



I 07 大空像(緑小学校)
(台座正面 タテ)
大空

昭和五十八年三月
建 立
題 字 第二代校長 霜触重雄
彫刻制作 本田明二



I 08 融和
(台座右下 ヨコ)
(北斗中学校)

融 和
昭和59年4月



I 10 未来への輪
(台座正面 ヨコ)
(向陽台中学校)

未来への輪
1987・4
平田まどか



I 09 日時計
(台座正面 ヨコ)
(末広小学校)

大きくはばたけ末広っ子
贈 第8代校長 背戸正信
建立 昭和60年4月吉日



I 1 1 千歳第三小学校跡碑
 (正面上部) (正面下部 ヨコ)

《航空写真》
 昭和三十二年撮影
 千歳第三小学校跡碑
 開校昭和23年6月1日
 閉校昭和43年7月31日
 平成7年3月 建立
 記念碑建立実行委員会



(背面 校章の下に校歌 タテ)

校歌 川村濤人作
 一、みおやたち 部落つくらすと
 つどひきて 心協せつ
 石狩の 荒野拓きし
 つとめこそ われらが使命
 二、みさくるや 台地の遠を
 流れつゝ 野をうるおして
 ひかりゆく 千才の川の
 清さこそ われらが希望
 三、からまつの 林のはてに
 空高く 煙ふく山
 樽前の 永劫に動がぬ
 すがたこそ われらが理想
 作曲 野々山博

I 1 2 悟りの門・学びの庭

・悟りの門 (千歳科学技術大学門柱)
 (柱の部分に 大学建学の精神)
 「人知還流」
 「人格陶冶」

・学びの庭モニュメント
 (大学創設の信条「格物の六訓」を刻む)
 「思考の目安」
 「存在の確信」
 「面壁の捨」
 「智慧の重さ」
 「縮少の限界」
 「陽の恵み」



学びの庭



悟りの門

I 1 3 美々学園通りモニュメント

(五基、奥の研究棟側から校門側へ)
 ①地球儀
 「情報発信基地 千歳市」

②天球儀
 「天体と宇宙」

③日時計
 「光と地球」

④立方体
 「結晶と重力」

⑤砂時計
 「地球の地力」



I 14 千歳市立中央小中学校跡地碑
(碑石正面 ヨコ)

千歳市立中央小中学校跡地の碑
千歳市長 東川 孝 書
平成 12 年 3 月



I 16 二宮尊徳像(北栄小学校)
(台座正面 タテ) 二宮尊徳像

人を好きになるには、
相手がして欲しいことを、
まず、自分からしてあげることです。

(台座右側面)
人を
好きになろう。

元気な人が困っている人を
助けるのは、当たり前のことです。

(台座左側面)
友達を
大切に。



像:ブロンズ 踏台含む高さ H:107
台座:御影石 台座全体の高さ H:108
台座上部分 H:15 W:48 D:56 (cm)

I 15 長都小中学校百周年記念植樹標
(正面 タテ)

長都小中学校百周年記念植樹
平成十三年十一月九日



(台座背面)
平成二十三年六月吉日
寄贈 加藤武仁
政子

I 17 千歳市立真町中学校閉校記念碑

(碑石正面 タテ)

真町中学校校歌

作詞 稲葉留雄

作曲 高岡春男

真々地二―三 北海道千歳高等支援学校校地内

一 雲流れきて 夢を呼ぶ
みどりの丘の 学園に
若いひとみが 輝いて
汚れをしらぬ 友情の
輪を限りなく ひろげゆく

二 はるかに煙る 樽前の
きびしい姿 望むとき
試験を越えて 一筋に
理想の光 求めつつ
ここに英知の 花かおる

三 郷土の誇り 清流に
映す歴史の 影深く
いまよみがえる 北国の
未来を開く 喜びに
明るい 真町中学校



(碑石背面 ヨコ)

千歳市立真町中学校
閉校記念事業実行委員会
昭和 47 年 1 月 17 日 開校
平成 24 年 3 月 31 日 閉校
平成 23 年 11 月 建立



(碑石前に校訓銘台 タテ)
共生 錬磨 探究

碑石:御影石 H:79 W:60 D:15 (cm)
校訓銘台:黒御影石 H:25 W:46 下部 D:28
基壇含む全体の高さ H:168

J 01 溝口五左衛門之像

(人物像台石 正面 右からヨコ書き)

故郷千歳神社神主
溝口五左衛門之像

(人物像台石 右側面 タテ)

世話人
渡部榮蔵
中川種次郎
高塚團正
江平作藏
北岡吉太郎

(人物像台石 背面 タテ)

昭和四年
五月二十六日建之
溝口スワ
三島利七



(台座正面 タテ)

故溝口翁の
徳をしのひて
皇の道祈たて
はた年を
尽ししきみが
いさを雄々しも
札幌神社宮司 富岡盛彦

J 02 記念碑

(碑石正面)

記念碑
昭和十三年四月三十日千歳郡千歳村字
ネシコシ番外地力示文雄其所有地五反
十九歩ヲ当地八幡神社敷地トシテ寄附
セラレタルヲ記念スルタメ之ヲ建立ス

(台座背面、タテ)

昭和十三年四月
發起者
東條嘉太治
廣重佐次郎
同志會一同
建立



J 03 鈴木六三郎像

(胸像台正面 右からヨコ書き)

故鈴木六三郎

(台座背面 タテ)

生国福島県
大沼郡高田
町ヨリ明治四
十年七月二
十五日本村ニ
移住昭和十五
年七月九日亡行
年七十歳
昭和十六年七月建立
鈴木六平



J 04 神社地寄贈記念碑 (協和神社)

(碑石正面 タテ)

昭和三十三年九月十八日献立

神社地寄贈記念碑

寄贈者 橋本考一

(碑石左側面 タテ)

氏子一同

(碑石右側面 タテ)

寺下貞次郎

世話人 武田 養七

酒井直次郎



J 05 鈴木梅四郎翁頌徳碑

(碑石正面 タテ)

鈴木梅四郎翁頌徳碑

翁ノ慧眼ナル 明治卅七年ノ此當時尙未開ノ吾水力電気
界ニ能ク此大発電所ヲ建設シ王子製紙苦小牧工場操業ノ
根幹ヲ作レルハ吾人後輩ノ讚歎措ク能ハサル所ナリ茲ニ
翁ノ和歌ト俱ニ石ニ勒シ永ク之ヲ後世ニ傳ヘントス

支笏湖よなれのいさをは

昏をつくり

光となりて世々にかかやく

昭和卅五年九月 高※菊次郎 謹識并書

※「鳥」の下に「山」

(碑石左側面下部 タテ)

東京青山

石勝刻



J 06 渡部榮藏翁像

(台座正面 タテ)

渡部榮藏翁 (題字 北海道知事 町村金五書)

(台座背面 タテ)

渡部榮藏翁を讃える

翁の見識は「石狩 苫小牧を結ぶ八十五軒の内陸運河」
の開きくと千歳空港の設置提唱にみる 翁の功績は千歳の
産業 支笏湖の観光と開発の現実が実証する 翁は性温厚
にして しかも情熱を包蔵する 萬人敬慕の人であり 公
徳心篤く私財を投じ千歳市発展に尽す 翁また深く郷土を
研し誌とする 子弟教育に意を用いこれに傾倒す ここに
翁の記念像設置にあたり萬感の思いをこめ遺徳を讃える

北海道開発審議会長 黒澤 西 歳



明治十九年佐渡真野村に生れ 同三十八年千歳にて商業を営む 大正八年村
会議員爾来三十余年地方自治に貢献 幾多の公職を歴任し地域社会に寄与す
昭和三十年千歳市名誉市民 同年五月没す 茲に翁の遺徳を偲び之を建立す

昭和四十一年十一月三日

渡部 祐 一郎

※渡部関連会社社員一同

(※山三ふじやの屋号)

※胸像(ブロンズ)制作者 田畑 一作(新制作協会員)

K 01 麒麟像

(台座正面 青銅板 タテ)

麒麟像建立誌

麒麟麦酒株式会社は創立以来幾多の変遷を経て
業容の発展のうちに七十有余年を閲したが
今日の盛業は偏に先輩諸氏の労苦の賜物であり
この機にあたり物故された諸先輩の遺徳を偲び
冥福を祈念するため昨年十一月千古不滅の霊場
たる高野山に供養塔を建立するに到った
その折塔域内にわが社の象徴たる麒麟像一体を
守護像として定置したが茲に供養塔建立に因み
同型ものを鑄造し本店工場並びに総合研究所に
これを設置永くその意を伝えんとするものである

昭和五十六年三月吉日

麒麟麦酒株式会社

取締役会長 佐藤保三郎

取締役社長 小西秀次



K 02 記念樹いちい碑

(正面 タテ)

記念樹 いちい

千歳市民文化センターの建設と85国際森林年
を記念し 国際ロータリー第二一地区千歳ロータリ
クラブ会員一同から千歳市の文化の発展と青少年健
全育成に奉仕の理想を掲げ千歳市に贈る

昭和六十年五月三十日

国際ロータリー第二一地区

千歳ロータリークラブ



K 03 巢立ち像

(台座正面 ヨコ)

巢立ち

(台座右側 タテ)

千歳ライオンズクラブ

認証二十五周年記念

昭和六十二年八月二十二日



K 05 友好記念植樹碑

(碑石正面 タテ)

友好記念植樹

鮭の習性に思いをよせて

備前の国裸祭りの西大寺より

鮭の遡上する街千歳へ

見直そう

我らの故里

培おう奉仕の心

一九九三年六月

西大寺ライオンズクラブ

千歳中央ライオンズクラブ



MEMORY
of
SHUNSUKE KONDO
1991



K 04 近藤メモリアル

(台座正面 ヨコ)

K06 二宮尊徳像

(J A道央千歳支店)

(台座正面 タテ)

少年
二宮尊徳像



(趣意書碑正面 タテ)

報徳と協同組合

二宮尊徳は世界で最初(一八二〇年)に信用組合を設立した人です

当時疲弊に苦しむ農村を興すには 先ず「人の心を耕やす」ことが先決と考え

て一介の農民でありながら自ら報徳の心「至誠 勤労 分度 推譲」を実践し

ついに全国六百余ヶ村の復興成し遂げたのです

北海道に於ける農漁業協同組合には

この報徳精神が組合運動として受け継がれています

少年尊徳像は 翁が少年時代学問に励み家業に勤しむ姿を像に表現し 自主自立の精神を象徴したものです

報徳生活の指針

「至誠」真心をもって己れを律し誠意をもって人に接すること

「勤労」世の中に必要なものを勤めて生産すること

「分度」自ら限度をわきまえ生活と仕事に計画性をもつこと

「推譲」自主互譲の心をもって社会の為にも譲り及ぼすこと

平成十年七月吉日 千歳報徳会

(趣意書碑右側面 タテ)

寄贈者

像

平成十年四月

木滑康雄

台座

平成十年七月

千歳報徳会

K07 鮭蟹供養碑

(碑石正面 タテ)

鮭蟹供養碑

(碑石背面 タテ)

平成十一年十月吉日建之



(注 工場に伴い泉沢一〇〇七番地へ移設)

K08 市の木かつら碑

(正面 ヨコ)

市の木

かつら

先人が丸木船として使うなど交通の要衝として発展してきた千歳にとってとても結びつきの深い木です。

平成 19 年 9 月 21 日

千歳中央ライオンズクラブ

認証 25 周年記念植樹



L01 千歳川会所跡標

(正面 タテ)

千歳川会所跡

(背面 タテ)

千歳神社宮司 近藤勝人

之建

(「千歳川番屋の図」の下に解説文タテ)

千歳川会所跡

江戸時代、松前藩では藩士たちにアイヌの人々と交易をする独占的な権利を与えられた。やがて藩士たちはこの権利を商人にあずけ運上金(税金)を納めさせます。権利のおよぶ範囲を「場所」といい、交易所として「運上屋」と呼ばれる建物が建てられました。寛政十一(一七九九)年、幕府は蝦夷地を直接支配し「運上屋」を「会所」と改名します。「会所」は幕府の役人もいて交易のほかに役所の出張所の役割もしました。

千歳では文化元(一八〇四)

年売場会所と買場会所の二カ所がたち蝦夷地で初めて鉄銭が交易に使われました。文化六(一八〇九)年、二つの会所は一カ所にまとめられ「千歳川会所」となりました。

安政四(一八五七)年七月十八日、蝦夷地探検家として北海道の名付け親として有名な松浦武四郎(一八一八〜一八八八)は千歳を訪れ千歳川会所のにぎやかな様子を上図のように描いています。

絵によると会所はちょうどこのあたりに置かれていたようです。

昭和六三年三月

千歳市教育委員会



L02 フレトヒのチャシ趾標

(正面 タテ)

フレトヒのチャシ趾



L03 石勝線 0キロ標 (JR南千歳駅)

(碑石正面 ヨコ)

0キロ標
石勝線
営業キロ 132.4KM
開業 昭和56年10月1日
K&A



L04 新渡戸稲造記念碑

(碑石正面 題字右からヨコ書き)

去 華 就 實
稲 造

(碑石背面、タテ)

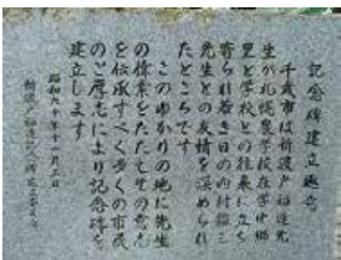
記念碑建立趣意

千歳市は新渡戸稲造先生が札幌農学校在学中郷里と学校との往来に立ち寄られ若き日の内村鑑三先生との友情を深められたところですが、このゆかりの地に先生の偉業をたたえその意志を伝承すべく多くの市民のご厚志により記念碑を建立します

昭和六十年十一月三日

新渡戸稲造記念碑建立委員会

(揮毫 神原武雄)



L05 筆塚碑

(碑石正面 タテ)

筆塚



L06 サーモン橋レリーフ

(1) 花園、上流側

(銘板の上に、ヨコ)

千歳川

(銘板 タテ)

里遠き

しこつの湖に

筏より

棹さしゆけば

魚のより来る

安政四年七月

松浦武四郎



(2) 花園、下流側

(銘板の上に、ヨコ)

サーモン橋

(銘板 タテ)

千歳川とサケ

産卵期のサケの親魚は婚姻色(雲状斑)

をあらわし、雄の両顎の前端は突き出して鉤状に曲がっています。サケには回遊経路の異なる魚群があり、それぞれの地方の方言により、アキアジ、アキザケ、シロザケ、トキシラズなどと呼ばれて区別されています。

日本の河川に遡上するのは主としてアキアジであり、千歳川にも八月から十一月に遠く北太平洋ベーリング海を回遊し、孵化後三年から五年で成熟(雄は稀に二年で、大部分は四年で成熟)し遡上してきます。

千歳川では明治二十九年親魚捕獲のため水車型の捕魚車(インディアン水車)を採用、三十年には採卵場を千歳川下流に設置して人工採卵による孵化を行います。

魚を三月から四月にかけて現在は年間約四千万尾を放流し、資源の維持と増殖に努めます。

(3) 住吉、上流側

(銘板の上に、ヨコ)

サーモンばし

(銘板 千歳川番屋の図・跋文 左側にタテ)

安政四年七月

松浦武四郎画

石場高門跋文

「夕張日誌」より



(4) 住吉、下流側

(銘板の上に、ヨコ)

昭和62年11月竣工

(銘板 タテ)

松浦武四郎

(一八一八〜一八八八)

北海道の名付け親で六度にわたる探検を行い、道内の山川の様子を世に紹介した功労者でした。彼が最初に千歳を通ったのは弘化三年(一八四六)二度目の蝦夷探検のときでした。

そして安政四年(一八五七)五度目の北海道探検のときに著した「夕張日誌」の中でその頃の千歳のことをくわしく紹介しています。

千歳川番屋の図もこの年七月に訪れたときに篆刻家でもあった武四郎が描いたもので、これに石場高門が跋文したものです。

跋文読解

この名を改られし

事とも思出て

あしたつの跡とめたる

ちとせ川ちとせの後も

かくてすむらむ

丸山道子訳

「夕張日誌」より

L07 川村湊人歌碑

(碑石正面、タテ)

凍らさる

みつうみの

藍ふかければ

ひかりを

のみて

天に韻けり

湊人

※第二歌集「北の眉」一七三ページ所載歌

「凍らざる湖の藍ふかければ光をのみて天にひびけり」

(碑石背面、タテ)

川村湊人先生の

教子、同僚、歌友、相

諮り、先生縁りのこの

地に歌碑を建てて長

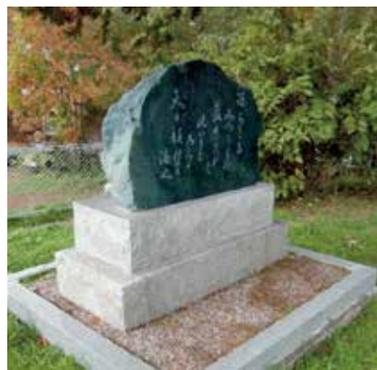
く偉徳を仰ぎ文運

を捧らんとするものなり。

川村湊人先生歌碑建立実行委員会

一九九〇年九月吉日

石匠 古渡二郎 謹刻



L08 北国通信撰文塔

(上段ボード正面・背面とも同じ 著者自筆原稿転写 タテ)

子供のときから

僕は千歳線というのが

好きだった。

渡辺淳一

(側面 タテ)

千歳市

(下段ボード正面・背面とも ヨコ)

子供のときから 僕は千歳線というのが 好きだった
渡辺淳一 「北国通信」より



L 09 登山安全祈願碑

幌美内 恵庭岳登山口

(碑石正面 タテ)

登山安全祈願

(碑石背面 タテ)

昭和三年五月十七日

山頂神社建立者 恵庭村御料青年団有志



碑石:御影石 H:109 W:31 D:15 (cm)

基壇:コンクリート H:15 W:76 D:80

拾遺 4 協働事業「石碑・石像調査」の原典

『千歳市所在の碑・塔調べ 報告書 昭和六年三月 北海道千歳市』と表記されたこの報告書の巻頭言「はじめに」は次のように述べている。

「千歳空港の開基六〇周年を迎え、さらに六三年には、北海道経済の発展を一身に担い、まちづくりの大きな起爆剤となる新千歳空港が開港するという重要な節目に当たり、二一世紀への橋渡しをすべく先人の記した史蹟の調査整備を行い、史蹟記念物として長く保存していくと共に、市民にこれらの所在を明確にし、その功績を広く知らしめることが責務と思ひ、ここに本編をまとめる。今後とも、さらにこうした史蹟の追及調査を継続し、新しい観光資源等、市民のものとして活用されることを願う」。

五十一基の石碑・石像等を掲載するこの報告書を手がかりに、千歳を知る会とともに「石碑めぐり」を行った。その結果、その後移設されたもの、新たに設置されたもの等の多いことを知り、改めて調査と記録の必要性を感じていたことが二回にわたる協働事業応募の契機であった。それは、とりも

なおさず「史蹟調査の継続、市民のものとして」との先人の想いに応えることであろう。



石碑等調査引用参考文献

- ・千歳市所在の碑・塔調べ報告書 千歳市 昭和六年三月
- ・千歳市史 更科源蔵編著 昭和四年八月二日
- ・増補千歳市史長見義三編 昭和五八年三月二〇日
- ・新千歳市史 通史編上巻 千歳市 平成二二年三月一九日
- ・「新千歳市史」編さんだより 志古津 各号 千歳市
- ・砂礫に耕す・千歳開拓四十年の記録―
千歳市開拓農業協同組合 昭和五九年二月一日
- ・秦一明を讃える会記念誌
二代目戸長秦一明を讃える会 一九八九年八月八日
- ・郷土誌 ケネフチ物語 泉郷集落連合会 平成四年九月二二日
- ・一九九四年恒久平和祈念の碑建立記念誌
千歳市遣族会 平成六年一〇月二六日
- ・歎振う村人の夢ここに舞う 千歳飛行場開設七〇年記念誌
千歳飛行場を造った村民顕彰の碑建立実行委員会
平成八年九月二一日
- ・「千歳」千歳命名一九五年・開庁二二〇年記念誌
記念誌編集委員会 平成二二年九月

- ・東千歳の歴史 大橋四郎編集執筆 一九九九年一月(平成二一年)
- ・長都小中学校百年 長都校開校百周年記念事業協賛会
平成二二年一月一九日
- ・「千歳市蘭越小学校閉校之碑」心のともしび「復活の記録
千歳市蘭越小学校「閉校之碑」を考える会
二〇〇一年(平成一三年)九月二六日
- ・いずみさとのあゆみ↑平成五年↓平成十四年―
泉郷連合会 平成一五年二月一〇日
- ・苗別川 「報恩碑」を保存する会
二〇〇五・四・一(平成一七年四月一日)
- ・創業一〇〇年記念社史 株式会社 山三ふじや
平成一七年一月一日
- ・千歳科学技術大学創立二〇周年記念誌 千歳科学技術大学
平成二〇年五月
- ・パンフレット「千歳神社」 千歳神社

協働事業「市内石碑・石像の追加調査と碑文集刊行事業」
実施記録

千歳文化財保護協会

九月二六日(木) 第一回石碑等調査

調査個数 二基 参加者数八名

五月二三日(月) 協働事業申請に関し、千歳市埋文センターと打ち合わせ

車両走行距離 一一五キロ

五月二一日(火) 協働事業申請に関し、事務局会議

一〇月 二日(水) 協働事業「市民提案型」補助金受領

五月二四日(金) 協働事業申請に関し、千歳市埋文センターと打ち合わせ

一〇月 九日(水) 第二回石碑等調査

調査個数 五基 参加者数四名

六月二六日(水) 協働事業申請に関し、千歳市埋文センターと打ち合わせ

一〇月一〇日(木) 第三回石碑等調査

調査個数 三基 参加者数四名

八月二二日(木) 「市民提案型」協働事業公開プレゼンテーション

一〇月二三日(水) 碑文集作成に関し、事務局会議

車両走行距離 六〇キロ

八月二九日(木) 協働事業の選考審査結果(通知)受領

一〇月三〇日(水) 碑文集作成に関し、業者との打ち合わせ

九月 五日(木) 協働事業に関しての口座開設

十一月二八日(木) 碑文集作成に関し、事務局会議

九月 七日(土) 協働事業協定書等提出書類に関し、千歳市埋文センターと打ち合わせ

十二月十三日(金) 碑文集作成に関し、千歳市埋文センター・業者と打ち合わせ

九月二一日(水) 「市内石碑・石像の追加調査」に関し、事務的打ち合わせ

十二月二五日(水) 碑文集作成に関し、業者と打ち合わせ

九月二六日(木) 「補助金等交付決定通知書」受領

十二月二六日(木) 碑文集作成に関し、事務局会議・業者と打ち合わせ

九月二九日(木) 千歳市「市内石碑・石像の追加調査と碑文集刊行事業」に関する協定書提出

平成二六年一月 協働事業調査報告書「市内石碑・石像の追加調査と碑文集刊行事業」作成

九月二六日(木) 「補助金等交付決定通知書」受領

平成二六年二月 協働事業結果報告書提出

千歳文化財保護協会 紹介

☆ 会 員 三四名(五十音順)

☆ 発 足 昭和五四年一月二四日設立総会

☆ 設立目的 市内の文化財の保護と保護思想の普及を図り、諸活動をとおして会員相互に研鑽と理解を深める

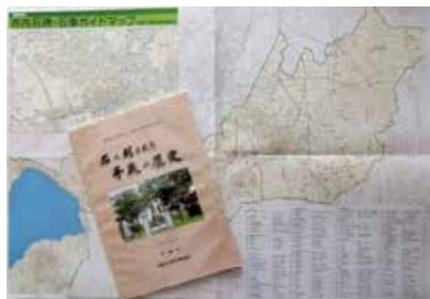
☆ 主な活動

- ・ 市指定史跡「美々貝塚」の整備清掃
- ・ (五)八月の第四土曜日午前、ほか随時)
- ・ 博物館、資料館、遺跡などの見学、研修旅行
- ・ (平成二一年九月、創立三〇周年記念研修旅行で青森県内の主な縄文遺跡・博物館等を見学)
- ・ 考古学、郷土史関係の講演会聴講、展示会見学など
- ・ 土器づくり、野焼き
- ・ (千歳市埋蔵文化財センター体験学習「土器を作ろう」協力)
- ・ 会誌「ちとせぶんか」の発行(毎年四月)
- ・ 定例会(毎月第二水曜日、夜)

☆ 千歳市との協働事業

- ・ 平成二一、二二年度 「市内石碑・石像などの調査事業」報告書・ガイドマップ刊行(会創立三〇周年記念事業として)
- ・ 平成二五年度 「市内石碑・石像の追加調査と碑文集刊行事業」報告書刊行

- ・ 伊藤悦子
- ・ 大木あき子
- ・ 大竹美恵子
- ・ 小田春次
- ・ 川村幸雄
- ・ 北村耕造
- ・ 木谷 稔
- ・ 木暮雅俊
- ・ 斎藤一明
- ・ 堺 昭子
- ・ 榊原茂樹
- ・ 榊原武雄(会長)
- ・ 高田美枝子
- ・ 高橋 理
- ・ 瀧石一正
- ・ 瀧石律子
- ・ 橘 逸朗
- ・ 田中達昭
- ・ 田中秀典(事務局長)
- ・ 谷上 隆
- ・ 出口 明
- ・ 手塚 賢(副会長)
- ・ 富田トシ子
- ・ 中野次男
- ・ 西澤 久(監事)
- ・ 羽沢初男
- ・ 藤本義一
- ・ 前田徳海
- ・ 守屋憲治
- ・ 山口 満
- ・ 山田文雄(監事)
- ・ 山田美千子(会計)
- ・ 渡辺敏子



あとがきに代えて

前回報告書のあとがきに「碑文だけを集めた冊子を作成したい」と書いてから三年、審査会プレゼンテーションの場では「重複」、「同じような内容では…」との見方から、協働事業として再度実施することに関係者の理解が得られるかどうか大いに危惧しましたが、幸いにもこの碑文集を刊行できましたこと、まずは関係各位のご理解とご協力に感謝し、厚くお礼申し上げます。

前回の調査後、北海道老人大学同窓生千歳会(道老大千歳会)の高橋徳夫氏の誘いを受け、当会と千歳を知る会との三会合同で、調査した石碑等を手がかりに千歳の歴史を振り返ってみようとの視点から五回の研修会を実施しました。

話題とした石碑等にまつわる史実を調べ、伝聞などにふれ新たな知見を得る中で、石碑・石像などが「市史を補完する重要な史料」であり市民にとっての貴重な文化資産であるとの認識をさらに深めました。

たとえば、「千歳市史」と「増補千歳市史」のいずれにも本編に日露戦争に関する記述は見当たりません。また、双方の年表とも日露戦争という歴史用語は載っていません。しかし、泉郷神社境内の「凱旋記念碑」には「明治三十七八年役 出征軍人」として九名の氏名が刻まれており、「明治三十九年三月 ケヌフチ青年会建之」とあります。また、中央八幡神社境内の「忠魂碑」には「明治役戦死者」として十六名の氏名が階級、勲功などとともに刻まれており建立年月日の刻字は見当たりませんが、別の資料に「建立明治四四年 在郷軍人会」とあります。この十六名が千歳村全体の日露戦争における戦死者と思われます。

明治期千歳の開拓の歴史に照らしてみる時この二つの碑は、そのほとん

どが十代の少年として家族とともに千歳村の各地域に入殖し、困難を極めた開墾開拓作業の大切な働き手となっていた二十代で日露戦争に応召し、ぶじ帰還できた八名と不幸にしてそれがかなわなかった十六名の若者たちの大切な記録であることがわかります(凱旋記念碑に刻名の九名のうち一名は忠魂碑に戦死者として刻まれている)。

なお、最新の「新千歳市史」には忠魂碑刻名十六名のうち四名について、公的資料「忠魂録」をもとに戦没前後の状況が記述されています。報告書の表題を「石に刻まれた千歳の歴史」としたのは、以上のような石碑・石像等の碑文が語る史料としての価値や意義に視点をおきたいの思いによるものです。

多くの市民の皆さんに千歳の歴史を振り返る手がかりとして、二冊の報告書を活用していただければ幸いです。

前回の調査後、碑文等の記録はヨコ書き版の体裁で収録保存しておりますが、この碑文集を作成するにあたって全体的な読みやすさを考えタテ書き版とすることとしました。その組み替え作業を会員の立道美恵子さんにお願ひし、原版を作成していただきました。それをもとに試行錯誤しながらなんとか体裁を整えたのがこの碑文集です。立道さんは都合によりこの碑文集の刊行を待たずに退会されましたが、そのご助力に対しこの場を借りて心からお礼申し上げます。

また、市埋蔵文化財センターの高橋理センター長には市民協働推進課との連絡調整や碑文集作成へのアドバイスなど、公務多忙にもかかわらずくご協力、ご支援をいただきました。ありがとうございます。

最後に、市民協働推進課の皆さんのご配慮に感謝し結びと致します。

平成二六(二〇一四)年一月

千歳文化財保護協会副会長 手塚 賢

協働事業「市内石碑・石像などの追加調査と碑文集の刊行事業」報告書

石に刻まれた千歳の歴史 碑文編

- 発行 千歳市・千歳文化財保護協会
- 事務局 千歳市勇舞5丁目9-8
TEL0123(22)3753
- 発行日 平成26年1月31日
- 印刷所 千歳印刷株式会社

題 字/榊原 武雄